

長野県松本市
AGATAMACHI
県町遺跡 XII
——緊急発掘調査報告書——



2003.3

松本市教育委員会

長野県松本市
AGATAMACHI

県町遺跡 XII

——緊急発掘調査報告書——

2003.3

松本市教育委員会

序

県町遺跡は松本市の中央部に位置し、市街地へ向かって流れる薄川の右岸、県一帯に拡がる遺跡です。本遺跡は昭和55年のあがたの森公園整備に伴う発掘調査に始まり、それぞれの開発に先立って過去11回の調査が行われております。

今回は長野県松本県ヶ丘高等学校の体育館建替え工事が計画されたため、松本市が同校から委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施したもので、同校内の調査としては5か所目となります。

発掘調査は平成13年11月から14年3月にかけて行われました。冬期間の厳しい調査となりましたが、関係の皆様のご尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、弥生時代から中世にかけての、さまざまな時代の生活跡を発見することができました。中でも縄軸陶器や硯などの出土は特筆されます。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変重要な資料になることと思われます。

しかしながら、発掘調査をして記録保存することは、遺跡を破壊しているという側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされるのは大変貴重なことだと思います。

最後になりましたが、厳しい寒さのなか発掘調査にご協力をいただいた参加者の皆様、また調査に際しては多大なご理解とご協力をいただいた、長野県松本県ヶ丘高等学校の皆様、地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

松本市教育委員会 教育長 竹淵公章

例　言

- 1 本書は、平成13年11月19日から平成14年3月25日にかけておこなわれた、松本市県2丁目1番1号に所在する県町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は松本県ヶ丘高校が体育館を建替えるのに伴って松本市教育委員会がおこなったものである。
- 3 本遺跡は平成13年度に発掘調査を行い、平成14年度に報告書の作成を実施した。
- 4 本書の執筆分担は次の通りである。
第1章：事務局
第2章第1節：森 義直
第3章第2節：清水 実
第3章第3節第2項：太田圭輔
第3章第3節第3項：内堀 団
上記以外：澤柳秀利
- 5 本書の作成・編集にあたっての作業分担は次の通りである。
遺物洗浄接合：五十嵐周子、内澤紀代子、百瀬二三子
土器・陶磁器実測：竹内直美、竹平悦子、松尾明恵、八板千佳
土器・陶磁器トレース：太田万喜子、久保田瑞恵
石器実測：太田圭輔、堀 久士
石器トレース：太田圭輔
金属製品保存処理：洞澤文江
金属製品実測：内堀 団
金属製品トレース：内堀 団
遺構図調整・整理：石合英子、澤柳秀利、清水 実
遺構図トレース：太田万喜子、久保田瑞恵、澤柳秀利
図版組み：石合英子、澤柳秀利、清水 実
写真撮影：（現場写真）澤柳秀利、清水 実
（遺物写真）宮崎洋一
（航空写真）株式会社 共同測量社
- 6 総括・編集：澤柳秀利
本書の中で使用した遺構名の呼称は次の通りである。
第1号住居址→1住 第1号掘立柱建物址→1建 第1号土坑→1土 第1号ピット→P1
第1号堅穴状遺構→1堅 第1号溝址→1溝 第1号流路址→流路1 第1号集石→集石1
遺物包含層調査におけるグリッド番号の呼称は、そのグリッド北西隅の座標を用いている。
- 7 土器・陶磁器の実測図において断面図の白抜きは弥生土器及び土師器で、（古）は古墳時代土器を表す。スミ塗りは須恵器、陶器、磁器で、（緑）は綠釉陶器、（青）は青磁、（白）は白磁、（NS）は軟質須恵器、（K）は灰釉陶器、（陶）は陶器を表し、表示のないものは須恵器である。
- 8 本遺跡の調査及び本書の執筆・作成にあたって松本県ヶ丘高等学校風土研究会にご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
- 9 本調査における出土遺物及び現場で作成した測量図、写真等の諸記録は松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館に保管・収蔵されている。（松本市立考古博物館 〒390-0823 長野県松本市大字中山3738番地1 Tel0263-86-4710）

目 次

序

例言

目次

第1章	調査の経緯	4
1.	調査に至る経過	4
2.	調査体制	4
第2章	遺跡の環境	6
第1節	遺跡の立地と地形・地質	6
第2節	歴史的環境	7
第3章	調査結果	10
第1節	調査の概要	10
第2節	遺構	13
1.	竪穴住居址	13
2.	掘立柱建物址	17
3.	土坑	17
4.	ピット	18
5.	竪穴状遺構	18
6.	集石	18
7.	溝・流路址	18
第3節	遺物	29
1.	土器・陶磁器	29
2.	石器	48
3.	金属器	50
第4章	調査のまとめ	61

写真図版

図・表目次

図目次

第1図	土層概念図	6
第2図	遺跡の範囲と周辺遺跡	8
第3図	調査範囲図	9
第4図	遺構配置図（1・2面）	11
第5図	遺構配置図（3・4面）	12
第6～10図	竪穴住居址図	21
第11図	竪穴住居址・掘立柱建物址・竪穴状遺構・溝	26
第12～13図	土坑	27
第14～21図	遺物実測図（土器・陶磁器）	40
第22図	出土石器	49
第23図	金属器実測図	50
第24図	基本土層（東トレンチ西面、136住周辺部分）	62

表目次

第1表	県町遺跡住居址一覧表	19
第2表	県町遺跡竪穴状遺構一覧表	19
第3表	県町遺跡溝址・流路址一覧表	20
第4表	県町遺跡土坑一覧表	20
第5表	出土土器観察表	35
第6表	遺構主要諸元一覧	48
第7表	遺物主要諸元一覧	48
第8表	遺構略号一覧	48
第9表	実測図掲載固体属性一覧	48
第10表	器種一覧	48
第11表	石材略号一覧	48
第12表	石材単位器種組成	48
第13表	遺構単位石材組成	49
第14表	遺構単位器種組成	49
第15表	主要諸元一覧	50
第16表	遺構金属別単位所謂器種	50

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

平成12年度に実施した公共事業照会の中で、長野県松本県ヶ丘高等学校において大体育馆の建替え事業が計画されていることが明らかとなった。同校を含む一帯には、周知の埋蔵文化財包蔵地である県町遺跡があり、過去11回の発掘調査が行なわれ、多数の遺構遺物が発見されている。そこで、松本市教育委員会では同校並びに長野県教育委員会高等教育課と県町遺跡の保護について協議した。その結果、既存体育馆が解体された後、事業に先立って緊急発掘調査を実施し記録保存を図ることとなった。

発掘調査の実施にあたっては、同校から松本市が委託を受け、現場での発掘調査、整理作業及び調査報告書の刊行等の業務は松本市教育委員会が行うこととした。委託契約は平成13年8月27日付で締結し、同年11月19日に発掘調査を開始した。本調査は生活面が複数である上、遺構密度が高い集落であったため、長期間の調査となつたが、平成14年3月25日をもって現場作業を終了した。

整理作業及び調査報告書の刊行については、平成14年4月15日付で前年度と同様に委託契約を締結し、平成15年3月20日をもってすべての業務を終了した。

2 調査体制

(1) 調査団

調査団長 竹瀬公章（松本市教育長）

調査担当者 潤柳秀利、清水完（文化課）

調査員 松尾明恵、宮嶋洋一、森義直

協力者 飯田三男、五十嵐周子、石合英子、井上直人、今村克、入山正男、内澤紀代子、久保田豊子、河野清司、清水陽子、下島和代、竹内直美、竹平悦子、田中一雄、中村恵子、中村美ゆき、林和子、廣田早和子、福島勝、布野行雄、布野和嘉夫、布山洋、洞沢文江、特井敏夫、宮田美智子、百瀬二三子、八板千佳、矢崎寛子、山崎朋友、渡辺順子

(2) 事務局

松本市教育委員会教育部文化課

有賀一誠（課長）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同、～平成14年3月）、田口博敏（同、平成14年4月～）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、渡邊陽子（嘱託）、塙原祐一（同）

第2章 遺跡の環境

第1節 県町遺跡の地形・地質

調査地の立地

本県町遺跡は松本盆地の南東部にあり、東部山地から西流する薄川によって形成された扇状地上で北西に緩く傾斜しており標高598m～602mの間にある。位置は旧松本市街の東端で薄川へは南へ400m、女鳥羽川の清水橋へは北西へ約700mの地点にある。東には2～3kmで美ヶ原から続く第三紀層の筑摩山地があり、西側は奈良井川、梓川を越えて15kmほどで西山の中古生層からなる飛騨山地に至る。県町遺跡の発掘は既に第11次まで行われており、今回の発掘は今迄の発掘のうち最も東端の標高600～602mの間である。

周辺の地形・地質

本調査地を含む広大な松本盆地は、洪積世中期に起きた造盆地運動で誕生した構造性の盆地で、糸魚川～静岡構造線とほぼ平行な東・西の山麓線沿いの大断層と、それを横切る東西方向の断層により生じた南北に長い盆地であり、西と南は飛騨山地の中古生層とそれに貫入した火成岩類よりなっている。東部へ東北部は1000m～2000mのほぼ南北に連なる筑摩山地で、第三紀層とそこに貫入や噴出した火成岩類よりなっている。

調査地に關係のある盆地の南半分を占める主な堆積物は、飛騨山地を解剖し南北方向から流入する鎮川・奈良井川・田川などによる扇状地堆積物であり、これ等が合して複合扇状地を形成し、緩く東北東に傾斜している。

梓川系の砂礫層の東端は、清水付近まで到達していることがボーリングの結果判明している。

一度誕生した盆地の中に、その後洪積世後期になって松本市の旧市街地付近に局的な構造(断層)性盆地の形成が始まり、同時にその西部が傾動しながら隆起を始めて、それまで大口沢方面へ流れていた女鳥羽川が城山方面に流れをかえ、砂礫を第三紀層の上に載せ更に隆起の進行によりそこは城山となり、流路は東へ押しかれて現在に至っている。

この旧市街地付近に誕生した局的な盆地を埋める主役は、北からの女鳥羽川と東からの薄川である。

女鳥羽川は三才山峯(1500m)から流れ出す本沢を始め、幾つもの沢と合して西に向かって流れ、稻倉付近で流れを南にかえ、流路の首振りにより稻倉を扇頂として南に広がる扇状地を形成している。薄川は市街地の東部、三峰山や那津付近を源流として幾つかの沢と合流して西流し、入山辺地区の西端付近を扇頂として西に広がる扇状地を形成している。この両者は湯川付近で接し、市街地方面に複合扇状地を形成している。この局的な盆地は沈降による沼地の時代があり、そのため、その影響を引き継ぎ停滞水地特有のヨシやガマなど、湿地性植物の腐食に富む漆黒の粘土層が、地下30mまでの間に何層も存在していることが、過去のボーリングの結果知られている。

伊勢町及びその周辺の発掘から、1.6mm/年～1.7mm/年の速さで土砂が堆積しており、これは新村～穗高にかけての松本盆地の中心部での堆積速度が1mm/年ほどであるので、現在も松本駅前付近から松本城付近にかけてゆっくりと沈降が続いているものとみられる。

県町遺跡の地形・地質の変化について

県町遺跡は薄川扇状地の中程にあり、扇状地は流路が周期的に首を振ることによって形成されるので、弥生以後県町の遺跡の遺存状態と堆積状態を見ると、およそ次の3通りに分類できる。

[1] 本流まで遠く、洪水に対して安定な時期

この様な環境では腐食土層ができる。県町遺跡の弥生時代がこれに該当する。I～III次発掘地点では弥生の鍍層である腐食土層が多く残っているがIV次以降の発掘地点は、本流又は支流などで弥生の腐食土層の多くは流出している。

[2] 本流又は支流に洗われた時期

この場合は、流理構造を有する砂層または、ふるい分けのよい砂礫層となっており、その場にあった遺構の上部又は全てが下流に運ばれている。

[3] 本流が近くを流れたり、しばしば大洪水による堆積物の入れ代り(今まであった土層は下流に流れ、上流にあった土層が新たに堆積)が行われた時期

県町遺跡では、この[3]が最も多く、ふるい分けの極めて悪い汚い塊状の堆積物である。

県町の古墳時代以後の遺構は、[2]と[3]によってできた小起伏の激しい地形から、雨水や小流によって洗い出されて凹部を埋め、緩い起伏を形成しそこに各時代の生活が営まれたとみられる。

今次発掘地点の地形・地質の変化について

県町遺跡の最東端、標高600~602mのごく緩やかに西傾斜した建築物跡である。土層は今迄の発掘のうちで最も激しく複雑に変化しており、中々全体像がつかみにくいので、土層概念図でおよその状態を示すと第1図のようになる。土層の堆積は上層においては、およそS-60°-E方向からN-60°-W方向に向かってドミノ倒し状に、西側が古く東ほど新しく重なっており、洪水時には上流の地表面で風化しサビた砂礫を押し流しながら本地点を襲い、堆積物や遺構を多かれ少なかれ削って下流（西方）に送り、代って上流からふるい分けの悪い疊土が堆積している。多少の安定期には洪水層から洗い出された砂土が凹部をレンズ状に埋め、そこに9C以後の生活面や遺構が存在する。

発掘地点の西側隅の微高地は、度重なる洪水にも削り残され、弥生の遺物が存在し、弥生時代この微高地は住居以外何等かの目的で使われた可能性がある。

種の岩質

第三紀のフォッサマグナ堆積物とそれに貫入した火成岩類から成る筑摩山地を侵食、運搬してきた疊である。安山岩、玢岩、石英閃綠岩、石英斑岩、砂岩などであり、山地で多い泥岩はこの地点に達するまでに風化して土壤化している。泥岩について風化しやすいのは、砂岩と安山岩であり、砂土やシルト質土層となっている。

居住地としての本遺跡について

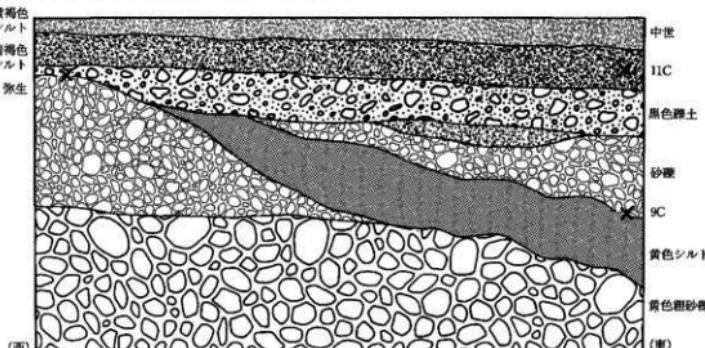
薄川のような出水率の大きな河川は、洪水時土砂の流出が多いため、短年月のうちに天井川化し、より低いほうへ流路が移りこのため必然的に流路が首を振り、奈良時代以後の薄川主流を、今迄の県町遺跡の発掘調査や現在残っている微地形などから推定すると下記のようになり、度重なる洪水で土砂が堆積し自然堤防ができると、入山辺地区南方付近やそれより下流で流れを北側の流路に変え、県町遺跡の北側をかすめて、当時低湿地であった駅前通り付近で川幅を広げ、田川に流入することもあったとみられる。

南方の北側



このような場合立地上県町遺跡は、大なり小なり洪水の洗礼を受けざるを得なかったことになる。このようにしばしば洪水の害のある所に、何故住居を作ったかという点については、

- ① 西に行く程低湿地で住居に適さないため。
 - ② 近くに重要な役所？があり居住せざるを得なかった。
 - ③ 敷十年以上洪水の安定期があれば、被害の恐ろしさを忘れるため。
- などいろいろ推定はできるが、②が気になるところである。



第1図 県町遺跡12次 土層概念図

第2節 歴史的環境

県町遺跡は、現在の行政区画では松本市県、中央、埋蔵及び大字里山辺にかけて存在する遺跡である。

前節でも述べた通り、この地区の歴史を語る上で欠くことの出来ない要素として薄川がある。この薄川は、現在でこそしっかりした堤防によって治水されているが、古来より知られる暴れ川で、戦後にいたるまで氾濫を繰り返している。したがってこのあたりでは縄文時代及びそれ以前の遺跡はほとんど確認されていない。この上流の林城山西麓の林山腰遺跡では、縄文時代中期の集落が確認・調査されている。

弥生時代については、県町遺跡は著名な遺跡である。昭和54年度以降行われている11次にわたる調査の、主にあがたの森公園造成に伴うものからは住居址44軒の他、多くの遺構が確認されており、遺物の量も多く、この地域を代表する弥生時代の遺跡として知られている。今回の調査でも、薄川の影響を受けながらも、少しではあるが弥生時代の遺構・遺物が確認されている。

古墳時代には、律令制度以前の地方行政の首長としての県首（あがたのおびと）に関連すると考えられている県という地名に関わる可能性や、県塚古墳（1～2号）との関連について考える必要もあるが、今までの調査では、当該期の住居址は4軒確認されているだけである。この地域の古墳時代を解明していく上では重要な遺跡であると考えられるわけであるが、不明な点が多いといわざるを得ない。

奈良・平安時代になると、この遺跡は縄釉陶器が多く出土する遺跡として知られてくる。本格的な調査は先述の昭和54年度まで行われないが、それ以前にも古くは大正期に、旧制松本高等学校や県ヶ丘高校（旧制松本二中）建設に伴って遺物が出土していることが知られ、その中には縄釉陶器も多く含まれている。また戦後には、松本県ヶ丘高校の校舎などの建替えに伴って縄釉陶器が出土している。調査によるものとしては、42軒の住居址、1軒の掘立柱建物址が確認されている。また県ヶ丘高校の西、大藏省（現財務省）公務員宿舎建設に先立つ11次調査では風字硯の他、皇朝十二銭の一つ隆平永寶が出土している。こうしたことから、奈良・平安時代には、このあたりに有力な集落が存在していたことを示し、今回調査の結果出土した絵彩文陶などは、更にそれを裏付ける資料であるといえる。またこの地域の周辺には、古くから研究者によって信濃国府が存在したとされる推定地がいくつかあり、それとの関連についても考えいかなければならぬ遺跡であるといえる。

中世になると、律令制度の衰退とともに、古代には有力な集落であった県町も衰退していったと考えられている。鎌倉・室町時代については文書資料も少ないため、この辺りについての様相は不明な点が多い。しかし今回の調査では、建物址などの具体的な遺構こそ見つからないものの、渡来鏡（北宋）や卸皿を出土する土坑などの他、区画溝とみられる直線状の溝も検出されていることから、後世の整地などによって多くは失われているが、中世においても何らかの形で生活の痕跡があったと考えられる。

近世以降、このあたりは松本藩領として、庄内組埋機村に組み込まれる。この県の地名に関わるともされる県明神がこの村内の県塚（県塚1号古墳）を境内に含む形で置かれる。また県ヶ丘高校の北側には、通称お塚と呼ばれる、近世松本城主であった戸田家の廟所が造られており、現存している。

近代になり、この辺りは大正期には文教地区として変貌を遂げてくる。大正8年に旧制松本高等学校（信州大学の前身）が招致され、県明神は南に移転（現在地県3丁目4番）し、境内は県境を除いて造成され、高校敷地に変わった。その造成に際して土師器などが出土したことは先に触れた。また大正12年に旧制松本第二中学校（現松本県ヶ丘高校）がその北東に建設された。この工事に際しても土器がたくさん出土しているようである。

戦後の学制改革により、旧制松本高等学校は信州大学となり、市内北部の旭へと移転した。その跡地は大学寮、旧校舎以外は空き地となっていたが、昭和54年にあがたの森公園として整備され、現在に至っている。またこれらの周辺は、松本市内外への住宅地として、宅地化が進んでいる。

参考文献：松本市 1993『松本市史 第二巻 歴史編1』

：松本市 1993『松本市史 第四巻 旧市町村編1』

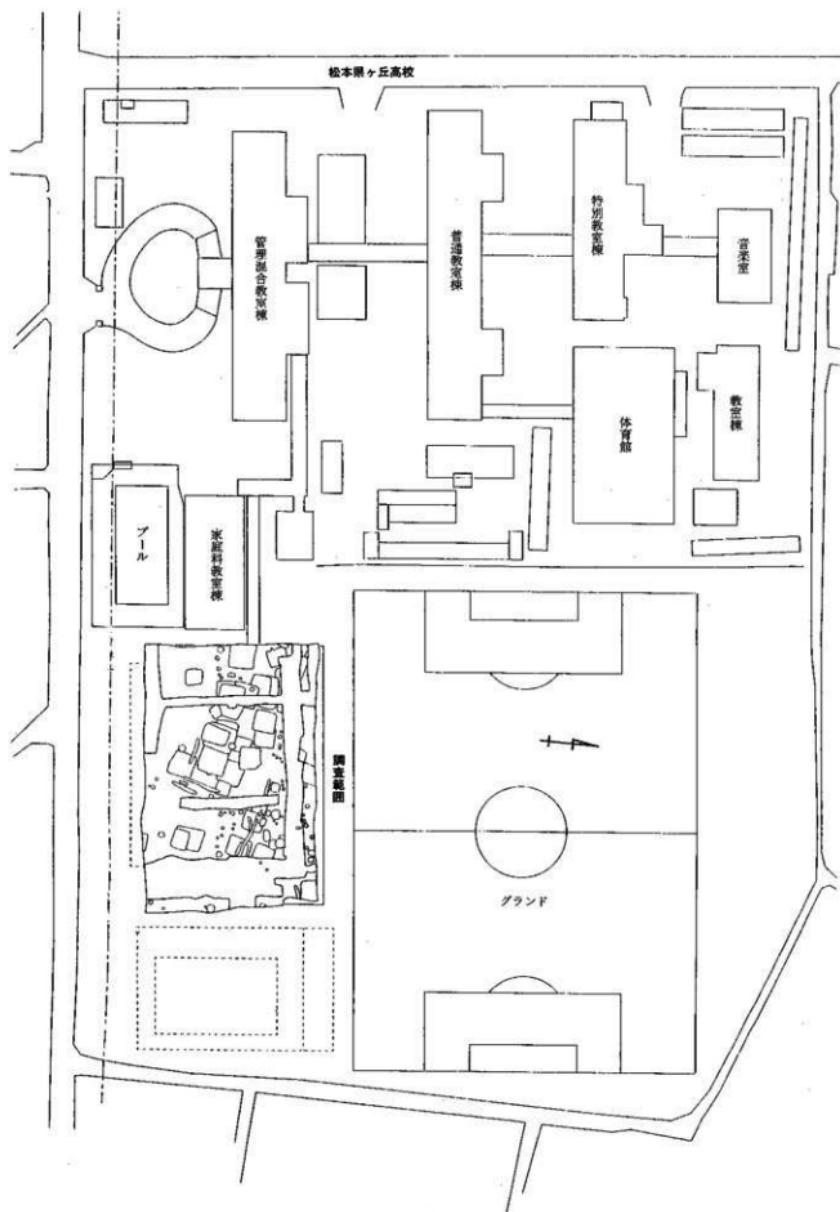
：東筑摩郡 松本市 塩尻市 市町村資料編纂会 1973『東筑摩郡 松本市 塩尻市誌 第二巻 歴史上』



●印：今回調査地点

- 1：元原遺跡 2：大輔原遺跡 3：大村立石遺跡 4：大村前田遺跡 5：沢村北遺跡 6：塚田遺跡 7：沢村遺跡 8：横田遺跡
- 9：岡の宮遺跡 10：惣社遺跡 11：田町遺跡 12：横田古屋敷遺跡 13：新井遺跡 14：宮北遺跡 15：片端遺跡
- 16：堀の内遺跡 17：下原遺跡 18：女鳥羽川遺跡 19：四ヶ谷遺跡 20：丸の内遺跡 21：大名町遺跡 22：兎川寺遺跡
- 23：荒町遺跡 24：土居尻遺跡 25：針塚遺跡 26：県町遺跡 27：北小松遺跡 28：伊勢町遺跡 29：本町南遺跡
- 30：天神西遺跡 31：埋櫛遺跡 32：林山腰遺跡 33：筑摩北川原遺跡 34：筑摩遺跡 35：筑摩南川原遺跡
- 36：千鹿頭北遺跡 37：御符遺跡 38：三才遺跡 39：神田遺跡 40：林遺跡 41：小島遺跡 42：国司塚遺跡 43：桃仙園古墳
- 44：御母家(1～2)古墳 45：車塚古墳 46：県塚(1～2)古墳 47：大塚(1～2)古墳 48：針塚古墳 49：北川原古墳
- 50：巾上古墳 51：御符古墳 52：林城(大城) 53：林城(小城)

第2図 遺跡の位置と周辺遺跡



第3図 調査範囲

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

1 調査地

今回の調査地は松本市県2丁目1番1号の松本県ヶ丘高校の敷地内にある体育馆予定地で、現況は旧体育馆解体後の更地である。県町遺跡は、前述のとおり現在までに11次にわたる調査が昭和54年度以来おこなわれており、今回は第12次調査となる。調査対象は、新体育馆の床面積1400m²であるが、そのうち北側はグラウンド崩壊などの恐れがあるため、その部分を除いた約1200m²について調査を実施した。

2 調査方法

今回の調査にあたっては、まず重機を使用して整地層を除去している。排土置き場の関係上西側と東側と2回に分けて掘り下げた。まだ若干の旧体育馆の基礎捨石が残っていたため、それらを除去し、土層及び遺構確認のためのトレンチとした。東側部分では4面の生活面を確認し、日程の都合上全体ではないが、一部については掘り下げ、調査を実施した。西側部分は、一部2面の生活面を確認したが、遺構を明瞭に捉えることが困難であったため、グリッド調査を実施した部分もある。磁北を基準とし、全体図のN、S、E、Wは方位を表す。また数字は基準点からの距離を示している。遺構番号は、住居址、掘立柱建物址については第11次調査の番号を継承し、竪穴状遺構、土坑、溝については12次調査ということで1201から付している。ピット、集石遺構、流路は1から付している。

3 遺構

住居址37軒、土坑49基、ピット69個、掘立柱建物址1棟、竪穴状遺構2基、集石遺構3ヶ所、溝5条、流路址4条が検出されている。

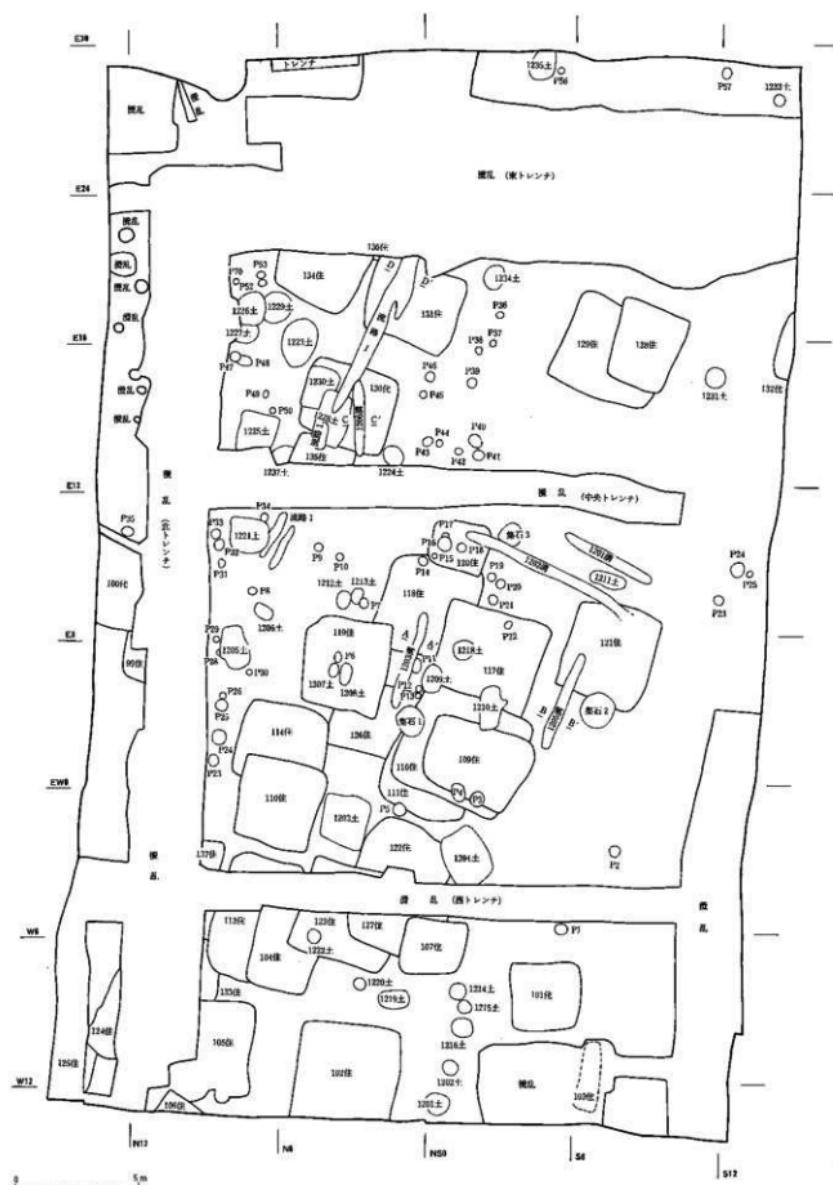
住居址を含む多くの遺構が平安時代に属すると考えられるが、中世に属する遺構も確認されている。一部弥生時代の遺物が出土する遺構もみられる。土坑の用途については不明であるが、ゴミ穴的に使用されたとみられるものもある。ピットは、掘立柱建物址を構成するもの以外についての用途は不明である。流路は、薄川の氾濫及び一時的な本流とみられる。溝は、何らかの区画溝とみられる。

4 遺物

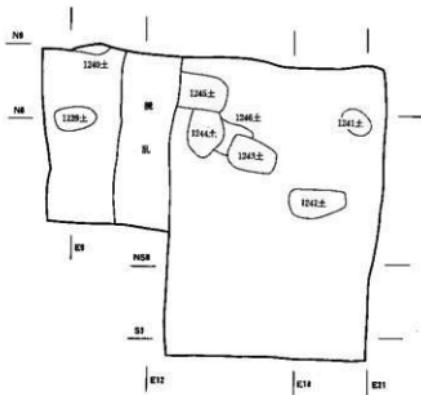
弥生時代から平安時代、中世にかけての遺物が出土している。弥生時代の遺物は、甕或いは台付甕を中心に、101住より出土がみられ、あがたの森公園造成に伴う調査によって確認されている。平安時代の遺物は、土器・陶磁器では須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器の杯・碗といった食膳具、土師器甕・小型甕・瓶といった煮炊具、また綠釉陶器・白磁といった高級陶磁器片が出土している。金属製品は、北宋からの渡来銭を主体とした銅銭、苧引金具、紡錘車といった生活具、また刀子、釘、鉄鎌が出土している。石器では磨製石鎌などがみられる。特殊遺物としては綠彩文陶・綠釉陶器三足盤、白磁といった高級陶磁器の他、水晶製鏡帯、風字硯といった官術などに関連するとみられる遺物が出土している。

5 基本土層 (62ページ第24図: 東トレーン西面、136住周辺部分)

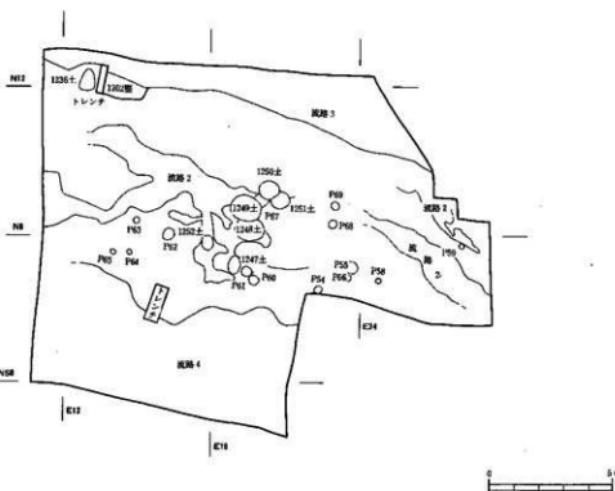
地形・地質については前述したが、本調査区の表土下は、全面ではないがよく結まった黄褐色砂質土(I)が堆積しており、ここに中世の遺構が存在する(第1検出面)。I層下部からは134住などの遺構が検出されている。その下層は砾層(XII)或いは暗褐色粘質土の面が広がり、平安時代の他、一部洪水の直撃を免れた弥生時代の面が残存する(第2検出面)。砾層は薄川の影響とみられ、何層か(IX、XI、XII、XIII他)に分かれれる。そのうち北西部において、2層みられるうちの下の砾層(XII)上面には、平安時代末の遺構が存在する(第3検出面)。北西部の、砾層下にある黄褐色砂質土層(XIV)の上面には平安時代前期の遺構が存在する(第4検出面)。全般的に薄川流路の影響を強く受けしており、その結果、一部では古い時代の遺構が上層から確認され、新しいものが下層から確認されるという、通常とは異なる遺構検出が行われた要因となっている。



第3面



第4画



第5図 造構配置図(第3・4面) S=1:200

第2節 遺構

1 積穴住居址（第6～11図、第1表）

第99号住居址（第6図）

北地区で検出した。南側の大半は搅乱によって消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は暗褐色粘質土で硬く縮まっている。壁は北側でよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。覆土中には、礫がまとまった形でみられる。遺物は黒色土器杯・椀・小型甕、灰釉陶器皿・段皿、須恵器壺がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第100号住居址（第6図）

北地区で検出した。北側は調査区外にかかり、東及び南側は搅乱によって消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土で硬くない。壁は西側の一部で残存しほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが黒色土器杯・椀がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第101号住居址（第6図）

西地区南部で検出した。ピットは3個確認したがいずれも掘り込みは浅く、柱穴とは考えない。床面は茶褐色砂質土であまり硬くなく、2ヶ所のテラス状部分がある。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は少ないがピット中より弥生土器壺或いは台付甕が2点出土している。本址の時期は、遺物から判断して弥生時代中期末に属すると考えるが、炉が確認できないため住居址ではない可能性がある。

第102号住居址（第6図）

西地区中央部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。床面は暗褐色砂質土で硬く縮まっている。覆土上層で人頭大の礫がまとまってみられたため、当初は2軒の切り合いであると考えたが、遺物の時期などから1軒と判断した。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物としては、土師器、黒色土器の杯・椀といった食膳具の他、土師器の甕・小型甕といった煮炊具、貯蔵具がみられ、同化し得たものだけで31点を数える。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第103号住居址（第6図）

西地区南部で検出した。本址の北側は大半が搅乱によって消滅しており、ピット、カマドは確認できず、またプランも不鮮明である。床面は黄褐色砂質土で硬くない。壁は南側の一部でやや緩やかに立ち上がる。遺物は少ないが須恵器杯Aなどがみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第104号住居址（第7図）

西地区北部で検出した。本址の東側中央部にて石組粘土カマドを確認したが、一部搅乱を受けており全容は不明である。ピットは確認できない。床面は黄褐色粘質土で硬く、貼り床となっている。壁は緩やかに立ち上がる。覆土中には、礫がまとまった形でみられる。遺物はあまり多くないが、土師器椀、須恵器杯等の食膳具の他、鉄釘、また特殊なものとして縁彩文陶底部が出土している。本址の時期は、遺物及び切り合い関係から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第105号住居址（第6図）

西地区北部で検出した。ピットは確認できない。カマドは西壁中央より検出した粘土カマドであるが、残存状態はあまり良好ではない。床面は黄色粘質土で貼り床となっており硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物としては、黒色土器杯・椀、灰釉陶器椀・皿、須恵器杯・蓋、土師器甕・小型甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第106号住居址（第7図）

西地区北部で検出した。西側の大半は調査区外で、東側の一部のみを確認した。ピットは1個確認したが柱穴と判断できない。カマドは確認することはできなかった。床面は黒褐色粘質土で硬く縮まっている。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は判然とせず、切り合い関係から判断して古代7期以降、9世紀中頃の平安時代前期以降に属する遺構であるとしかいえない。

第107号住居址（第7図）

西地区東部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。当初は2軒の住居址に分かれると考えたが、プラン及び遺物から1軒であると判断した。覆土は2層に分かれる。床面は焼土粒、炭化物混じりの茶褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・椀・盤、黒色土器椀、灰釉陶器段皿といったものがみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代13期、11世紀中頃の平安時代後期に属すると考える。

第109号住居址（第8図）

中央地区中央部で検出した。ピットは確認できなかった。カマドは西壁北隅の石組粘土カマドでよく残存している。壁はよく残存し、緩やかに立ち上がる。床面は暗茶褐色砂質土であり硬くない。一面に炭化材が多量にみられるため焼失した住居である可能性がある。遺物としては黒色土器杯・椀・軟質須恵器杯・灰釉陶器皿・土師器甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第110号住居址（第9図）

中央地区北部で検出した。全体的に大形の礫が存在する。ピットは2個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは石組粘土カマドが東壁中央で確認された。またそれに伴う焼土が全面に存在する。床面は茶褐色砂質土で硬く締まっている。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は多く、黒色土器杯・椀・鉢・須恵器杯・軟質須恵器杯・土師器鉢・甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第111号住居址（第8図）

中央地区中央部で検出した。ピットは3個確認され、その位置から柱穴とみられる。カマドは西壁中央で確認した粘土カマドであるが、焼土範囲が確認できる程度である。床面は暗茶褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は、土師器甕・須恵器杯・蓋・灰釉陶器椀・また東海系施釉陶器がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第113号住居址（第7図）

中央～中央西地区北部で検出した。本址中央部は攪乱によって消滅している。ピットは1個確認したのみで、柱穴と判断できない。カマドは確認できなかったが、東壁中央部床面に焼土の広がりがみられるため、この部分に存在した可能性はある。床面は黄褐色砂質土でやや硬く、床下から土坑2基を検出した。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが、黒色土器杯・椀・須恵器杯がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第114号住居址（第9図）

中央地区北部で検出した。ピットは1個確認したが、柱穴と判断できない。カマドは東壁中央で確認された石組粘土カマドである。覆土中には、大形の礫が含まれる。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は黒色土器杯・皿・須恵器杯・甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第115号住居址

西地区、104号住居址の周辺において遺物の散布及びカマドと考えられる焼土範囲を確認したため、これを住居址と考えた。しかし遺構として捉えることはできず、欠番とした。遺物として土師器杯が出土している。104号上面に異なる時期の、古代14～15期、11世紀末～12世紀の平安時代後期に属する遺構が存在したとみられる。

第116号住居址（第8図）

中央地区中央部で検出した。ピットは確認できなかった。カマドも確認できなかったが、東壁中央部に焼土範囲が存在することから、それがカマド残痕である可能性がある。床面は茶褐色砂質土で硬く締まっている。壁はあまり残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物は、土師器杯・甕・須恵器長頸甕・軟質須恵器杯・灰釉陶器椀・また土師器円筒型土器がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第117号住居址（第8図）

中央地区中央部で検出した。ピットは確認できなかった。カマドは東壁中央で確認した石組粘土カマドで残存状況は良い。覆土中には人頭大の礫がまとまった形で含まれる。床面は黄褐色砂質土で硬く、貼り床となっている。床下にはピットがみられる。壁はよく残存し緩やかに立ち上がる。遺物は多く、土師器甕・小型甕・円筒型土器・黒色土器杯・皿・椀・鉢・須恵器杯・蓋・椀・甕で、図化し得るものだけで40点を数える。金属製品では紡錘車・苧引具がみられる。特殊遺物として綠釉陶器三足盤脚部が貼り床下から出土している。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第118号住居址（第7図）

中央地区東部で検出した。ピット、カマドは確認できない。床面は小礫混じりの褐色砂質土で硬い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器小型甕・黒色土器椀・須恵器杯・灰釉陶器椀がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考えられる。

第119号住居址（第8図）

中央地区中央部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。床面は小砾混じりの茶褐色粘質土で硬い。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は多くないが、土師器杯・瓶がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代14期前後、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第120号住居址（第7図）

中央地区東部で検出した。ピットは5個確認され、そのうちP₁、P₃、P₄、P₅の4個は、その位置からみて柱穴であると考えられる。カマドは確認できなかった。床面は茶褐色粘質土で硬い。壁はほとんど残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第121号住居址（第10図）

中央地区南部で検出した。ピットは5個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは東壁北隅で検出された粘土カマドであるが、残存状態は良好ではない。覆土中には礫がまとまった形で多く含まれる。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はあまり残存しない。遺物は、土師器杯・碗・壺・壺、灰釉陶器碗がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代15期、12世紀前半の平安時代後期に属すると考える。

第122号住居址（第8図）

中央地区西部で検出した。西側の一部は搅乱により消滅している。ピットは2個確認したが、柱穴かどうかは不明である。カマドは東壁中央で確認した石組粘土カマドである。床面は一部が暗褐色粘質土の貼り床となっている他は黄褐色砂質土で硬く縮まっている。壁はあまり残存せず緩やかに立ち上がる。遺物は多く、土師器皿・小型壺、黒色土器杯・碗・皿・鉢、須恵器杯・長頸壺、土師器円筒型土器で、固化し得るものだけで32点を数える。金属製品では刀子がある。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第123号住居址（第10図）

中央～中央西地区北部で検出した。本址中央部は搅乱によって消滅している。ピットは確認されなかった。カマドは西壁中央で確認された石組粘土カマドである。床面は茶褐色砂質土で硬い。壁はあまり残存しないが、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器皿・黒色土器杯・碗・皿・須恵器長頸壺の他鐵鏃がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第124号住居址（第11図）

北西地区で検出した。南側の大半は搅乱により消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は茶褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第125号住居址（第11図）

北西地区で検出した。南側の大半は搅乱により消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は暗褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが、黒色土器杯・碗がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7～8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第126号住居址（第10図）

中央地区中央部で検出した。東側の一部が調査区外にかかる。ピット、カマドは確認できなかった。覆土中には、中央部に人頭大の礫がまとった形で存在する。床面は地山の暗褐色礫層で硬い。壁はあまり残存しないが、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが、土師器杯・碗・黒色土器杯・碗等がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第127号住居址（第8図）

西地区東部で検出した。東側の一部は搅乱により消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は茶褐色砂質土及び一部地山の礫層で硬い。壁はあまり残存しない。遺物は少ないが、土師器杯・小型壺、須恵器杯A等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第128号住居址（第10図）

中央東地区南部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。覆土上層には礫がまとまって存在している。床面は地山の暗褐色礫層で硬い。壁はあまり残存せず緩やかに立ち上がる。遺物は少ないが土師器皿・黒色土器皿がみられた。本址の時期は、遺物及び切り合ひ関係から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第129号住居址（第10図）

中央東地区南部で検出した。ピットは3個確認され、そのうちP₁、P₃がその位置などから柱穴とみられる。カマドは東壁中央部にある石組粘土カマドであるが残存状態は良好ではない。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はあまり残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・壺・黒色土器杯・須恵器杯・軟質須恵器杯の他、特殊品として紫水晶

製鉄帯（巡方）がある。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第130号住居址（第10図）

中央東地区西部で検出した。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられないが、渡来鏡（黒寧元寶）が出土している。本址の時期は、遺物から判断できず判然としないが、中世に属するもの可能性がある。

第131号住居址（第10図）

中央東地区東部で検出した。東側の一部は攪乱により消滅している。ピットは4個みられたが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第132号住居址（第10図）

中央東地区南端で検出した。南側の大半は調査区外にかかる。ピットは1個確認したが、柱穴と断定できない。カマドは確認できなかった。床面は暗茶褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ちあがる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第133号住居址（第10図）

西地区北部で検出した。北側の大半は攪乱により消滅している。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色粘質土でやや硬い。壁はほとんど残存しないが、ほぼ垂直に立ちあがる。遺物は少なく、黒色土器杯等が若干みられる。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第134号住居址（第11図）

中央東地区東側で検出した。ピットは3個確認したが、位置及び規模からみて柱穴とは考えられない。またカマドは確認できなかった。床面は茶褐色粘質土で硬く締まっている。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は少なく、須恵器蓋B等が若干みられたが混入と考える。本址の時期は遺物のみから判断しがたい。

第135号住居址（第10図）

中央東地区西側で検出した。西側の一部は攪乱により消滅している。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色砂質土及び一部地山の疊層で硬い。壁は、残存部ではしっかりとした垂直な立ち上がりを確認した。遺物は少ないが、土師器杯、朱墨痕のある灰陶器碗、また金属製品として刀子がみられた。本址の時期は、遺物が少ないため判然としないが、古代14期前後、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第136号住居址（第11図）

中央東地区東部で検出した。東側の大部分は攪乱により消滅している。ピットは確認できない。カマドも大半が消滅しているが、西壁中央部にある石組粘土カマドで、芯石は1個残存している。床面は茶褐色砂質土で硬い。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は少ないが、土師器甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第137号住居址（第11図）

中央地区北西隅で検出した。攪乱により南東部のみ残存する。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色粘質土で硬く締まっている。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は少ない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

2 挖立柱建物址（第11図）

第3号掘立柱建物址

4面で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。切り合い関係は1249、1250土に切られる。東西1間（292～304cm）×南北1間（274～304cm）の建物址である。柱穴のうちP₁（P67）からは、底部から礎板（石）が確認された。遺物の出土はみられないと本址の時期は判然としないが、検出面より判断して古代7～8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると思われる。

3 土坑（第12・13図、第4表）

今回の調査では49基の土坑を検出した。しかし、用途、時期を判断できるものは少ないが、いくつかからは遺物の出土もみられる。ここでは、遺物を伴うもの、時期・用途について考えうるもの数個について述べていく。3面の土坑は、平安時代の遺物がみられるが、中世に属する可能性を有する。

第1203号土坑（第13図）

中央地区西部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。遺物の出土はみられなかった。本址の時期は、遺物を伴わないため判断しがたいが、中世以降に属する可能性がある。

第1204号土坑（第13図）

中央地区西部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係は122住を切る。覆土中には埋がまとまった形で多く出土しているが用途については明らかではない。遺物は土師器小型甕、須恵器杯などがみられるが、混入と考える。本址の時期は検出面から判断して中世以降に属すると考える。

第1211号土坑（第13図）

中央地区東部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はないが、1201溝と1202溝に挟まれて存在する。出土遺物はみられず、また用途についても不明であるが、覆土も2つの溝と同質であることから、これらの溝に関連する可能性がある。本址の時期は判然としないが、中世以降に属すると考えられる。

第1221号土坑（第13図）

中央地区北東部で検出した。他遺構との切り合い関係は流路1を切る。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。遺物として、土師器杯、黒色土器碗等が出土している。本址の時期は遺物のみから判断できないが、切り合い関係から判断して、中世以降に属すると考える。

第1222号土坑（第12図）

西地区東部で検出した。他遺構との切り合い関係は104住を切る。遺物として、白磁の小壺が1点出土している。本址の用途については明らかではない。本址の時期は、遺物のみから特定することは難しい。

第1223号土坑（第13図）

中央東地区北部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。遺物としては「真」字刻書のある縁釉陶器杯1点の他、鉄釘が出土している。本址の時期については遺物が少ないため判然としないが、中世以降に属する可能性がある。

第1225号土坑（第13図）

中央東地区北端で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。掘り込みも浅く、遺構としては判然としないが、出土遺物として渡来銭の難寧元寶、元符通寶がみられる。本址の時期は、遺物から判断して中世以降に属すると考える。

第1226号土坑（第12図）

中央東地区北部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係は1227土、1229土を切る。底面に一段低くピット状の落ち込みがある。覆土中には焼土が含まれる。遺物としては東海系施釉陶器の鉢皿等の他、鉄釘がみられる。用途はゴミ穴の可能性がある。本址の時期は、中世1～2期、15世紀の室町時代に属すると考える。

第1228号土坑（第13図）

中央東地区北部で検出した。他遺構との切り合い関係は1230土、1206溝、流路1に切られる。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。遺物は、黒色土器Aの小型甕等が出土している。時期は遺物のみから判断できず不明であるが、周辺の土坑と同様、中世以降に属する可能性がある。

第1242号土坑（第13図）

3面で検出した。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。この面で検出した土坑の中では最大の規模であるが、用途は不明である。遺物として、渡来銭である明道元寶が1点出土している。本址の時期は、遺物から判断して中世以降に属すると考える。

第1243号土坑（第13図）

3面で検出した。4基連なって確認されたうちの1つで、他遺構との切り合い関係は1246土を切る。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。北西隅部分に焼土範囲がみられたが、用途は不明である。遺物は、土師器杯等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代11～12期、10世紀後半から11世紀始めの平安時代後期以降に属すると考える。

第1244号土坑（第13図）

3面で検出した。4基連なって確認されたうちの1つで、他遺構との切り合い関係は1246土を切り、1245土に切られる。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。用途は不明である。遺物は、土師器盤、灰釉陶器碗等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して、古代11～12期、10世紀後半から11世紀始めの平安時代後期以降に属すると考える。

第1246号土坑（第13図）

3面で検出した。4基連なって確認されたうちの1つで、他遺構との切り合い関係は1243土、1244土に切られる。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。用途は不明である。遺物は少なく、土師器小型甕等がみられる。本址の時期は、遺物から判断できず判然としないが、切り合い関係から古代11期、10世紀後半の平安時代後期以降に属すると考える。

4 ピット

今回の調査では69個のピットを検出した。しかし、建物址を構成するもの(P67、P68、P54、P61)の他は用途、時期の判明できるものは少ない。P69からは、第2号掘立柱建物址のP₁(P67)でみられたものと同様の礎板(礎石)が出土しているため、これは、建物址の一部である可能性がある。その他は、いくつかから遺物の出土がみられたものの、意図的に埋設したとみられるものではなく、用途について明らかにできるものはない。

5 竪穴状造構(第11図、第2表)

第1201号竪穴状造構

中央東地区東部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込み、床面は平坦で硬い。また、貼り床となっている。ピット等の施設はみられない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期、用途は不明であるが、中世の遺構である可能性がある。

第1202号竪穴状造構

4面で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込み、床面は平坦で硬い。ピット等の施設はみられない。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は判然としないが、検出面から判断して古代7~8期、9世紀後半の平安時代前期と思われる。用途については不明である。

6 集石造構

中央地区で3ヶ所検出した。いずれも黄褐色砂質土の地山を掘り込み、径5~20cmの礎がみられる。床面は平坦で硬いが内部施設はみられない。壁はほとんど残存しない。遺物はいずれからも出土していない。これらの時期は、切り合い関係などから判断して古代8期以降、すなわち9世紀後半以降であるとしかわからない。用途も不明である。

7 溝址・流路址(第11、13図、第3表)

第1201、1202号溝址(第13図)

両者とも中央地区南東部で検出した。ほぼ平行に掘り込まれ、間に1211土がある。幅はいずれも概ね45cm前後で一定しており、両岸とも壁は硬いことから人工の溝と考える。覆土は灰褐色砂質土の単層である。用途については特定できないが、流水痕がみられないことから、区画溝等であった可能性はある。遺物はみられない。両者の時期は、遺物から判断できないため不明であるが、中世の遺構である可能性がある。

第1203号溝址(第11図)

中央地区中央部で検出した。幅は概ね40cm前後で一定しており、両岸とも壁は硬いことから人工の溝と考える。土器師杯Aが1点出土しているが混入の可能性がある。覆土は灰褐色砂質土で単層である。用途については特定できないが、流水痕がみられないことから区画溝等であった可能性はある。遺物はみられない。本址の時期は判然としないが、1201、1202溝と直交方向にあたることからそれらと同様、中世の遺構である可能性がある。

第1204号溝址

中央地区北部で検出したが、流水痕があることから、流路1とし、欠番とした。

第1205号溝址(第11図)

中央地区中央部で検出した。幅は概ね40cm前後で一定しており、両岸とも壁は硬いことから人工の溝と考える。覆土は黄褐色砂質土で単層である。用途については特定できないが、流水痕がみられないことから区画溝等であった可能性はある。遺物はみられない。本址の時期は遺物から判断できないため不明であるが、1201、1202溝と直交方向にあたることからそれらと同様、中世の遺構である可能性がある。

第1206号溝址(第11図)

中央東地区北部で検出した。流路1から分岐する形で確認された。幅は概ね40cm程度で一定し、また両岸とも硬いことから人工溝と考えた。覆土は黄褐色砂質土である。遺物はみられない。本址の用途及び時期は不明である。

流路(第11図)

大きさは4条確認した。1面での流路1は、1203、1204溝と同間隔で平行に存在するため、元来はそれらと同様人工溝であった可能性もある。4面の流路2は、同じ4面の流路4からのオーバーフローであると考えられ、幾つかに分流したものが確認されている。流路3は、ある時期に薄川が大きく氾濫した流れの1つであると考える。流路4も同じく薄川からの、一時期的な流れの跡と考える。この他にも、固化していないが、1面において南東から北西にかけて、流路と考えられる礎面が広がっている。

第1表 住居址一覧表

()：推定、◊：残存

番号 No.	地区 Area	面積 m ²	平底形 Ground plan	規模		主導方向 Dominant direction	カマド 位置 位置	壁面 構造 構造	時 間 Period	参考 Notes
				長軸×短軸×高さ (cm)	床面積 (m ²)					
99	6	隅丸方形か	272×(112)×22	(1.56)	N-7'-E	不明	不明	-	9C中 平安前	100住に切られる 南側複数
100	6	不明	(364)×(196)×32	(5.44)	不明	不明	不明	-	9C後 平安前	99住を切る 北側複数区外 南及東側複数
101	6	隅丸方形	306×280×16	6.64	N-1'-E	なし	-	3	弥生中	住居址ではない可能性有
102	6	方形か	432×(402)×37	(15.14)	N-85'-W	不明	不明	-	9C後 平安前	西側調査以外
103	6	不明	302×(108)×5	<2.47	N-5'-W	不明	不明	-	9C中 平安前	北側複数 床面一部残存
104	7	長方形	(348)×285×12	<7.30	N-107'-E	東壁 中央	石組 粘土	-	9C中 平安前	123住を切る 123住に切られる 東側複数
105	6	方形か	400×(360)×16	<8.80	N-89'-W	西壁 中央	石組 粘土	-	9C中 平安前	133住を切る 106住に切られる 北側複数
106	7	方形か	(164)×(105)×5	<0.82	N 73' W	不明	不明	1	9C後～ 平安	105住を切る 古側調査以外
107	7	長方形	272×232×11	5.08	N-5'-W	なし	-	-	11C後 平安後	
108	-	-	-	-	-	-	-	-	-	火番
109	8	長方形	436×318×24	10.33	N-67'-W	北西 隅	石組 粘土	-	9C後 平安前	111, 116住を切る 1210土, P3, 4に切られる
110	9	方形	376×344×16	9.82	N 109' E	東壁 中央	石組 粘土	2	9C中 平安前	114住を切る
111	8	方形	394×372×18	11.45	N-67'-W	西壁 中央	不明	3	9C中 平安前	109, 116住, 磐石1, P5に切られる床面は残存
112	-	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番
113	7	異方形か	256×(156)×15	(5.76)	N 104' E	東壁 中央	不明	-	9C中 平安前	133住を切る 104住に切られる 中央部複数
114	9	方形	396×348×13	10.61	N-102'-E	東壁 中央	石組 粘土	1	9C中 平安前	110住に切られる 床面は残存
115	-	-	-	-	-	不明	-	-	-	欠番 通構ある可能性は高い
116	8	異方形か	488×(184)×10	(4.66)	N-111'-E	東壁か	不明	-	9C後 平安前	111, 1176住を切る 109住, 1210土, 無石1, P3, 4に切られる
117	8	方形	470×456×21	15.21	N-111'-E	東壁 中央	石組 粘土	-	9C中 平安前	118住を切る 116住, 1209, 1210, 1218土に切られる
118	7	方形	416×388×20	(12.03)	N 111' E	東壁 中央	粘土か	-	9C中 平安前	117, 119, 120住, 1203磚, P14に切られる
119	8	方形	370×348×8	(11.84)	N-13'-E	なし	-	-	11C後 平安後	118, 126住を切る 1207, 1208土, P6に切られる
120	7	長方形	254×212×5	4.33	N-5'-E	なし	-	4	不明	118住を切る P15, 16, 17, 18, 1202溝に切られる
121	10	方形	402×388×8	13.12	N-104'-E	北東 隅	粘土	5	12C前 平安後	磐石2, 1201, 1205溝に切られる
122	9	方形か	388×(280)×24	(6.31)	N-27'-E	東壁 中央	石組 粘土	-	9C中 平安前	123住, 1204住に切られる 西側複数
123	10	方形	426×422×23	(14.84)	N 71' W	西壁 中央	石組 粘土	1	9C中 平安前	104, 122住を切る 127住, 1222-1に切られる 中央部複数
124	11	方形か	(344)×(153)×14	(2.35)	N-16'-E	不明	不明	-	9C後 平安前	125住を切る 南及び北側複数
125	11	不明	(192)×(60)×13	(0.42)	不明	不明	不明	-	9C後 平安前	124住に切られる 南及び西側複数
126	10	長方形	354×288×10	9.37	N-15'-E	なし	-	-	9C後 平安前	111, 116, 119住, 1203磚, 磐石1, P13に切られる
127	9	隅丸方形か	416×(212)×6	(5.86)	N-20' E	不明	不明	-	9C後 平安前	122住を切る 107住に切られる 東半面複数
128	10	長方形	324×292×14	8.04	N-23'-E	なし	-	-	9C後 平安前	129住を切る
129	10	方形か	468×384×4	(15.22)	N-115'-E	東壁 中央	石組 粘土	3	9C中 平安前	128住に切られる
130	10	方形	366×354×11	10.86	N-18'-E	なし	-	-	不明	135住を切る 1228, 1230土, 1206溝, 沟路1に切られる
131	11	長方形	390×324×36	(10.76)	N 17' E	不明	不明	4	不明	136住を切る 1201壁, 沟路1に切られる 東一部複数
132	10	方形か	(276)×(80)×11	(1.48)	N-15'-E	不明	不明	1	不明	南側調査以外
133	10	方形か	328×(88)×16	(1.45)	N-3'-E	不明	不明	-	不明	105, 113住に切られる 北側複数
134	11	隅丸方形か	356×(304)×9	(6.39)	N-30'-E	不明	不明	3	不明	136住を切る 東半面複数
135	10	隅丸方形か	266×(150)×22	(2.25)	N 18' E	不明	不明	-	11C後 平安前	130住, 1228土, 沟路1に切られる 西半面複数
136	11	不明	(342)×(160)×16	(1.34)	N-72'-W	西壁 中央	石組 粘土	-	不明	131, 134住, 1201壁に切られる 東側複数
137	11	不明	(116)×(92)×8	(0.82)	不明	不明	不明	-	不明	南東調査のみ残存

第2表 積穴状造構一覧表

()：推定、◊：残存

番号 No.	地区 Area	面積 m ²	平底形 Ground plan	規模		主導方向 Dominant direction	内部施設 Interior facilities	時 期 Period	備 考 Notes
				長軸×短軸×深さ (cm)	床面積 (m ²)				
1201	中央東	11	長方形	(272)×178×38	(3.53)	N-72'-E	貼り床か	127住	131, 136住を切る 東側複数
1202	北	11	不明	(192)×(92)×39	(1.26)	N-13'-E	なし	9C後 平安前	1236土, 沟路3に切れる

第3表 溝址・流路址一覧表

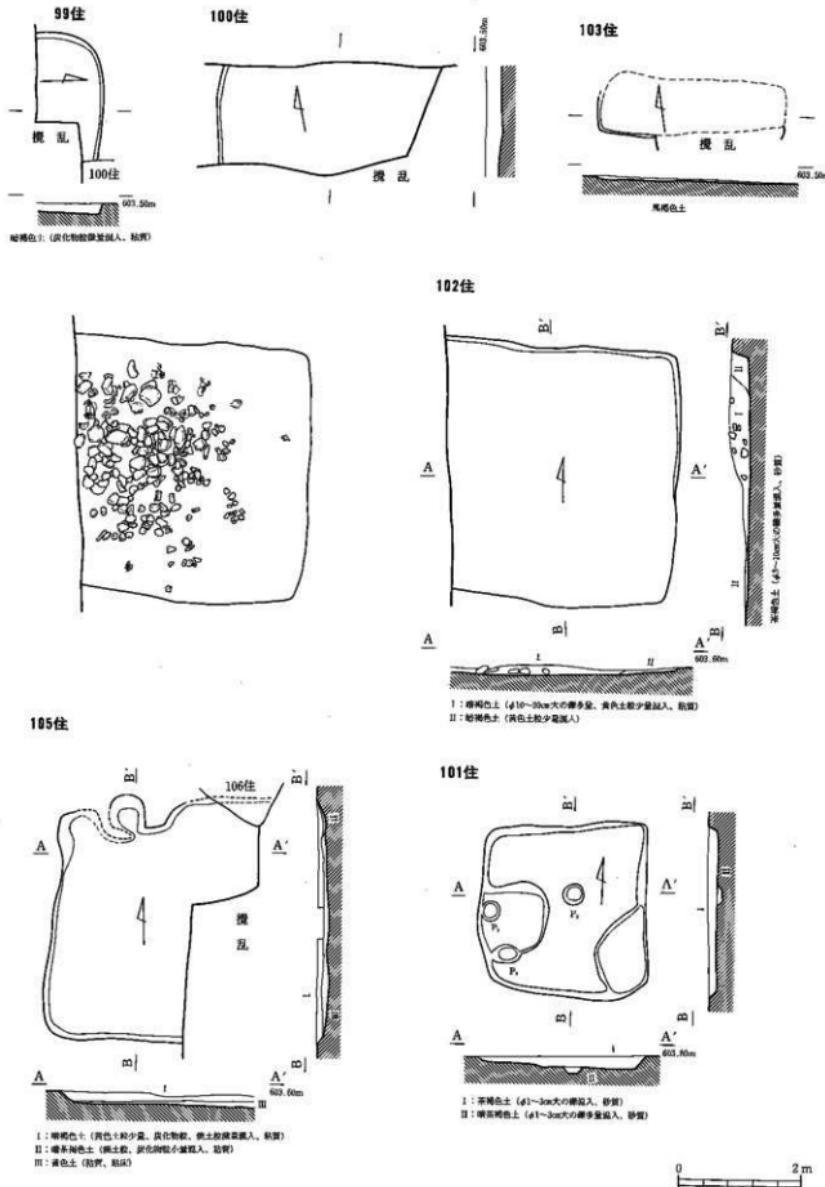
○：推定、△：残存

番号	地名	施設名	経緯	跡跡名	跡跡形	規模(cm)			跡跡形	跡跡形	跡跡形
						長さ	幅さ	高さ			
1201	中央	11	S6E510 (北端)	S09E08 (西端)	皿形	420	44	3	中世か	1202溝、1211土ヒットカ	
1202	中央	11	S6E210 (北端)	S10E05 (西端)	皿形	<744	40	5	中世か	1201溝、1211土ヒットカ	
1203	中央	1	NS0E07 (東端)	NO1E03 (西端)	皿形	406	49	6	中世か		
1204	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
1205	中央	2	S09E05 (東端)	S09E02 (西端)	皿形	415	40	5	中世か	121往を切る 流路1に切られる	
1206	中央	2	N09E16 (東端)	N09E13 (西端)	皿形	315	40	7	不明	130往を切る	
流路1	中央東～中央	1	N01E20 (東端)	N06E09 (西端)	皿形	<1415	40	7	中世か	130、131、135往、1201壁、1228土を切る 1221土に切れる 所々分断している	
流路2	4	—	N07E29 (東端)	N07E11 (西端)	皿形	2050	50	5	不明	流路4からのオーバーロード	
流路3	4	—	N09E27 (東端)	N14E11 (西端)	不明	1730	350～	80～	不明	一時的な薄川の大きな流れの跡か	
流路4	4	—	N03E21 (東端)	S03E11 (西端)	不明	0140	400～	65～	不明	一時的な薄川の大きな流れの跡か	

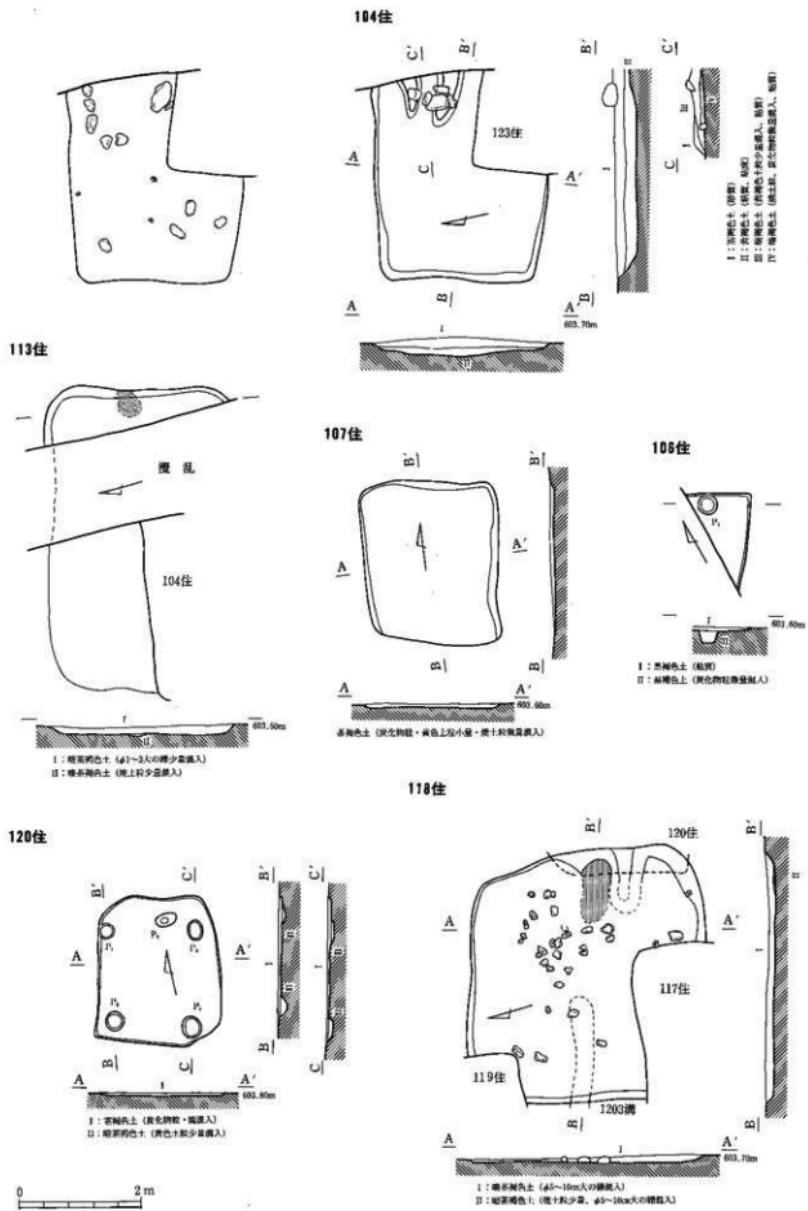
第4表 土坑一覧表

○：推定、△：残存

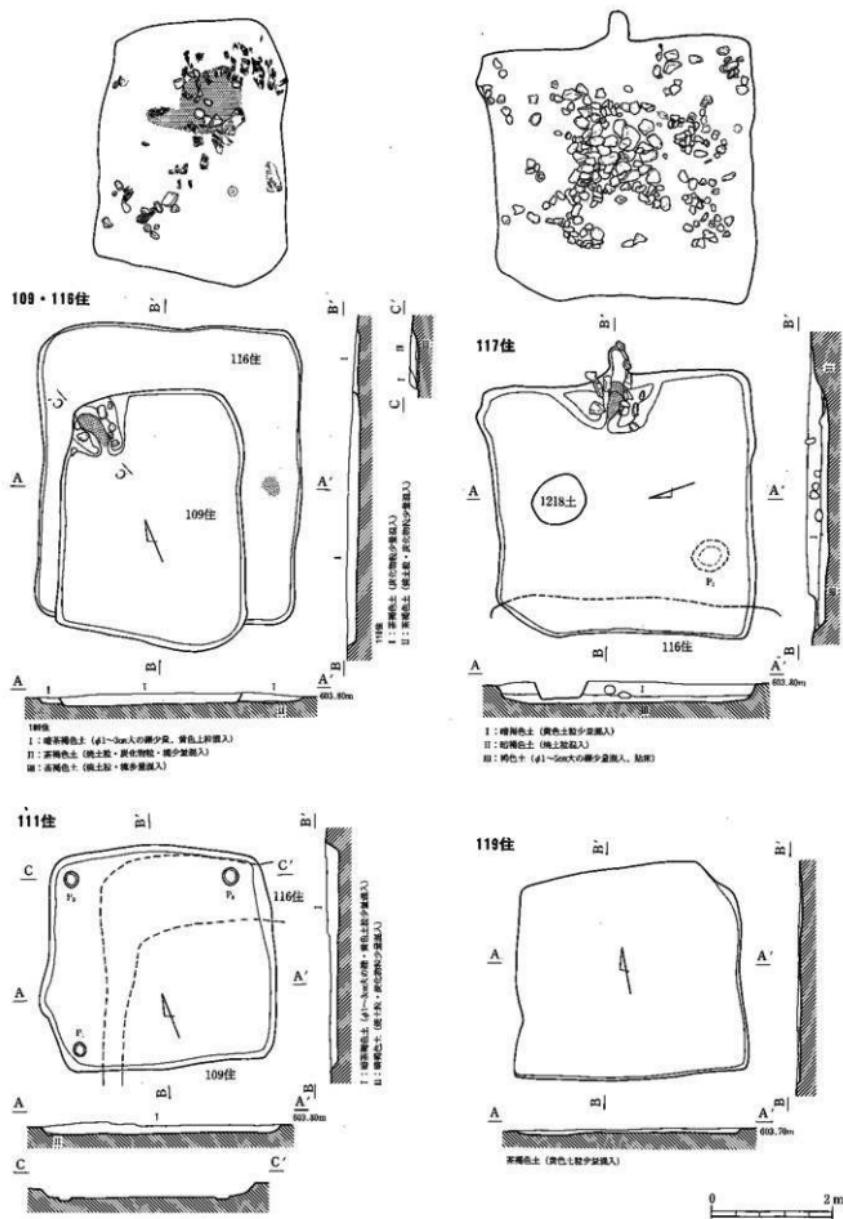
番号	地名	施設名	経緯	規模			跡跡形	跡跡形	跡跡形	跡跡形	跡跡形
				長さ	幅さ	高さ					
1201	西	1	円形	100×86×10							
1202	西	1	円形	79×58×15							
1203	中央	1	方形	204×188×18			中世か				
1204	中央	1	丸方形	240×189×23			中世か				
1205	中央	1	長方形	178×114×10			中世か				
1206	中央	1	長円形	99×54×14							
1207	中央	1	横円形	60×46×10			中世か				
1208	中央	1	長円形	92×50×16			中世か				
1209	中央	1	不整円形	118×108×12				119往を切る			
1210	中央	1	不整長円形	168×110×22			中世か	118、117往を切る			
1211	中央	1	長円形	152×62×11			中世か	109、116、117往を切る			
1212	中央	1	長円形	78×54×10			中世か	1201、1202溝とセッカ			
1213	西	1	不整長円形	88×44×9				P7に切られる			
1214	西	1	円形	92×68×14							
1215	西	1	円形	69×54×10							
1216	西	1	円形	88×80×16							
1217	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
1218	中央	1	円形	89×76×20				117往を切る			
1219	西	1	長円形	130×73×16							
1220	西	1	円形	52×50×16							
1221	中央	1	不整方方形	169×136×20			中世か				
1222	西	2	円形	56×52×10			中世か				
1223	中央東	2	横円形	208×140×35			中世か				
1224	中央東	2	長方形	216×140×21				西側削乱			
1225	中央東	2	方方形	178×148×7			中世	廻事元賛、元符通賛出土 西側削乱			
1226	中央東	2	横円形	156×112×82			中世(15C)	1227、1228土を切る 東商系馬鹿脚屋脚面、鉄釘出土 ゴミ穴か			
1227	中央東	2	横円形	<92×>80×24×6			中世か	1226土を切る 白磁小口出土			
1228	中央東	2	長方形	216×140×16			中世か	130往、1230土を切る 流路1に切られる			
1229	中央東	2	円形	(152)×128×64			中世か	1226土を切られる			
1230	中央東	2	員方方形	180×129×32			中世か	130往を切る 1228土、流路1に切られる			
1231	中央東	2	円形	84×82×12			中世か				
1232	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
1233	東	2	円形	48×45×22							
1234	中央東	2	円形	106×88×40			中世	廻事元賛出土			
1235	東	2	不整横円形	136×102×38				廻事元賛出土			
1236	北	4	不整横円形	88×68×34			平安前(9C)か				
1237	中央東	2	不整方方形	88×72×28				135往に切られる 西側削乱			
1238	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
1239	中央	5	横円形	168×98×8			中世か				
1240	中央	3	円形	(152)×(80)×32			中世か				
1241	中央東	3	横円形	134×92×40			中世か	一部分ピット状になっている			
1242	中央東	3	不整長方形	248×124×56			中世	明道元賛出土			
1243	中央東	3	方方形	196×156×10			中世か	1246土を切る 無土範囲有			
1244	中央東	3	不整長方形	204×148×28			中世か	1245、1246土を切る			
1245	中央東	3	方方形	(204)×146×20			中世か	1244土に切られる 西側削乱			
1246	中央東	3	不整	(154)×126×21			中世か	1243、1244土に切られる			
1247	中央東	4	横円形	78×50×20			平安後(9C)か				
1248	中央東	4	円形	112×(92)×8			平安後(9C)か	1249土に切られる			
1249	中央東	4	円形	124×116×24			平安後(9C)か	1248土、3建-P3(P67)を切る			
1250	中央東	4	円形	84×80×18			平安後(9C)か	1251土、3建-P3(P67)を切る 一部分ピット状になっている			
1251	中央東	4	円形	72×(68)×20			平安後(9C)か	1250土に切られる			
1252	中央東	4	円形	60×50×18			平安後(9C)か				



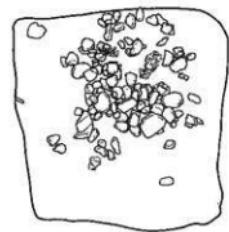
第6図 第99～103・105号住居址



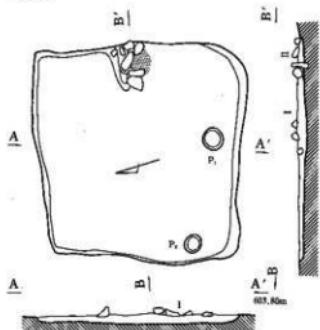
第7図 第104・106・107・113・118・120号住居址



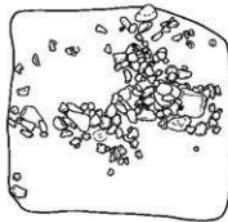
第8図 第109・111・116・117・119号住居址



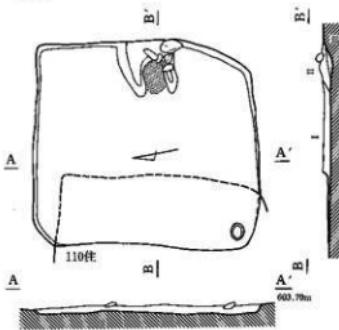
110住



I : 塔茶褐色土 (砂質)
II : 塔茶褐色土 (粘土質少量混入)

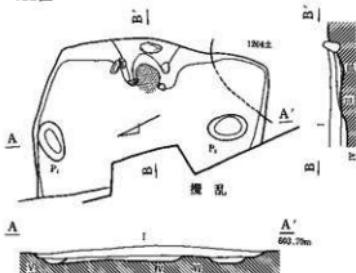


114住



I : 塔茶褐色土 (粘土質少量混入)
II : 塔茶褐色土 (粘土質)
III : 黑褐色土 (粘土質少量混入)

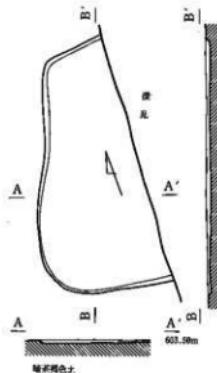
122住



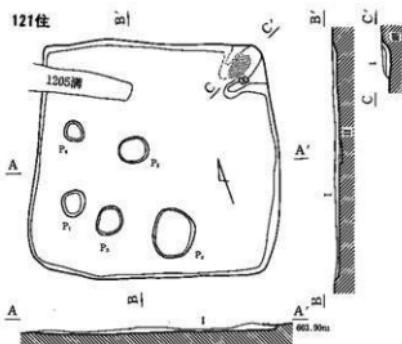
I : 塔茶褐色土 (約1~3cmの礫・地上岩・炭化物質少量混入)
II : 塔茶褐色土 (炭化物質・青色土粒・微量混入)
III : 黑褐色土 (炭化物質少量混入)
IV : 黑褐色土 (炭化物質少量混入)
V : 塔茶褐色土 (砂質)
VI : 塔茶褐色土

0 2 m

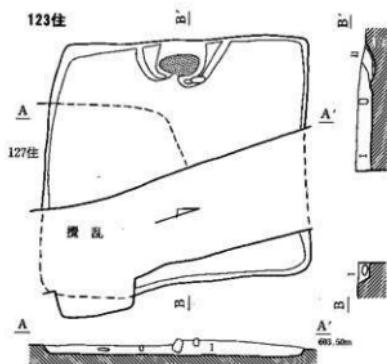
127住



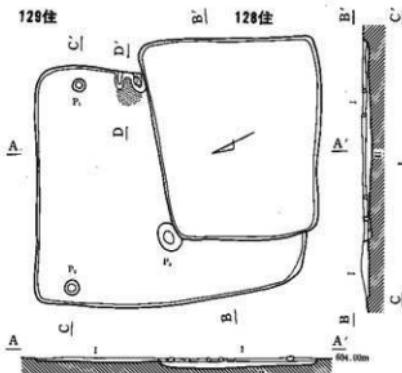
第9図 第110・114・122・127号住居址



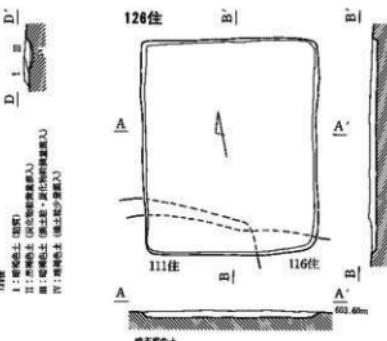
Ⅰ：暗褐色土（ $\phi 5\sim20$ cm大の礫步道、炭化物粒少量混入）
Ⅱ：暗茶褐色土（ $\phi 1\sim5$ cm大の礫步並混入、砂質）
Ⅲ：暗茶褐色土（炭化物粒、鐵土粒、鐵漿入、黏質）



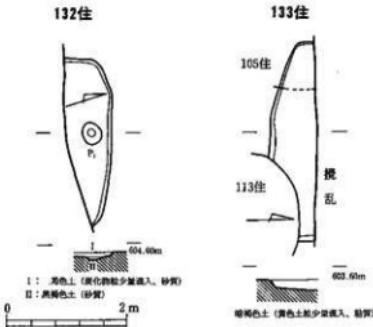
I: 茶褐色土 ($\phi 1\sim5cm$ の礫・炭化物粒・黄色土粒少量混入、砂質)
 II: 茶褐色土 (砂質)
 III: 茶褐色土 ($\phi 1\sim3cm$ の礫・炭化物粒・灰土粒少量混入、砂質)



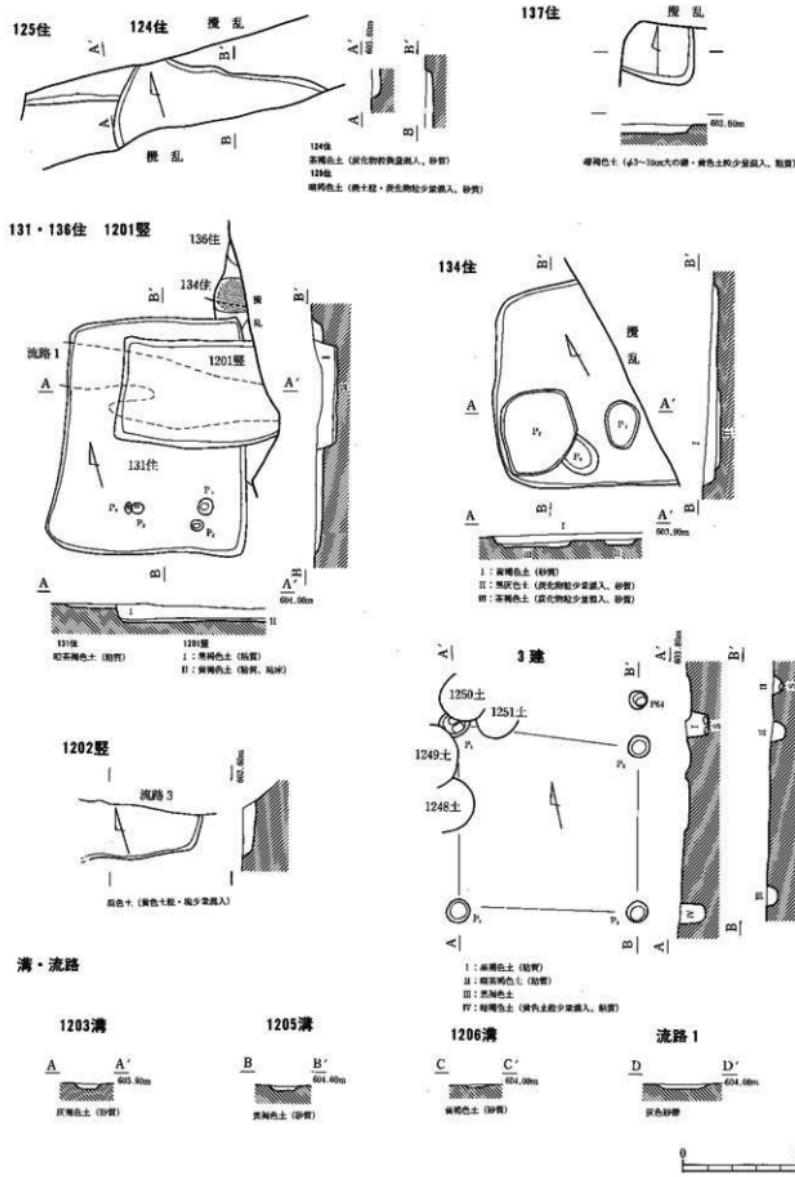
I : 茶褐色土 (φ10~30cm大の根多量混入)
II : 増茶褐色土 (φ1)~5cm大の根混入、砂質



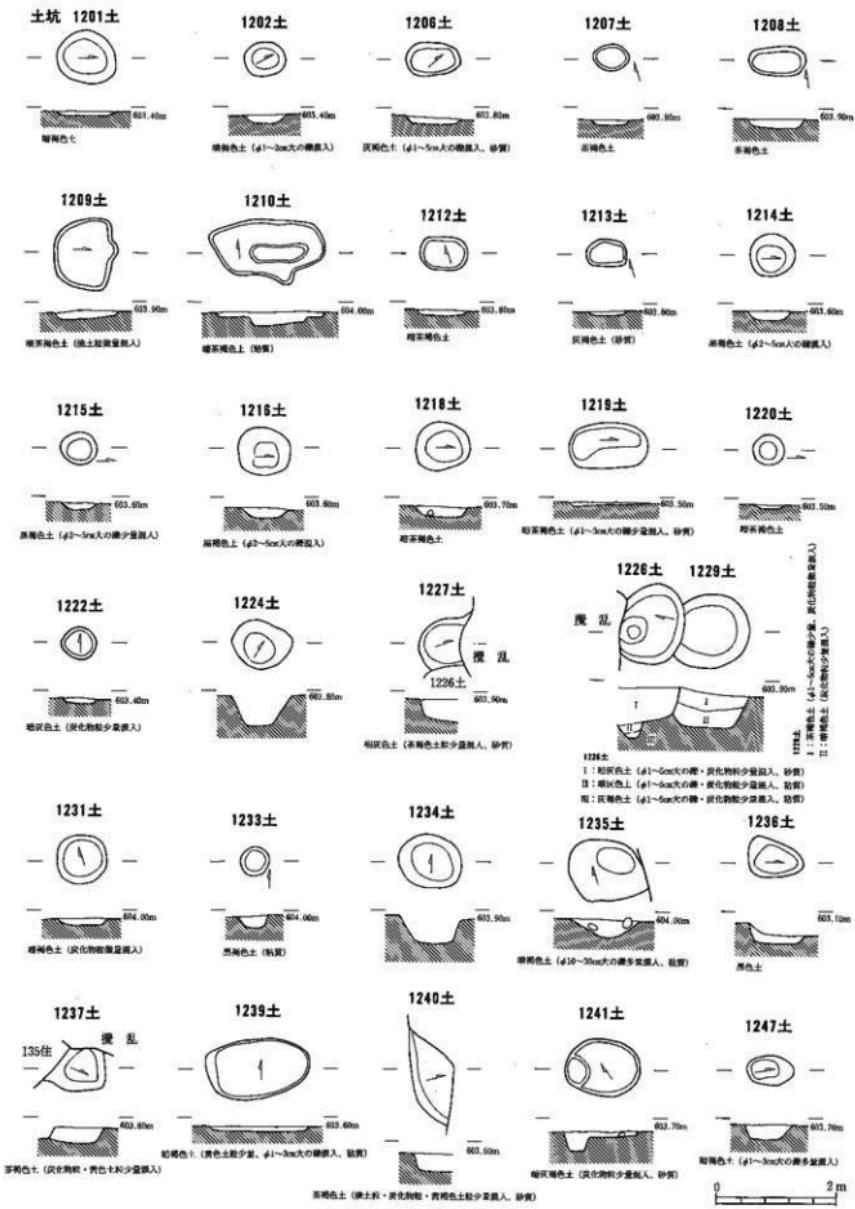
土壤褐色土



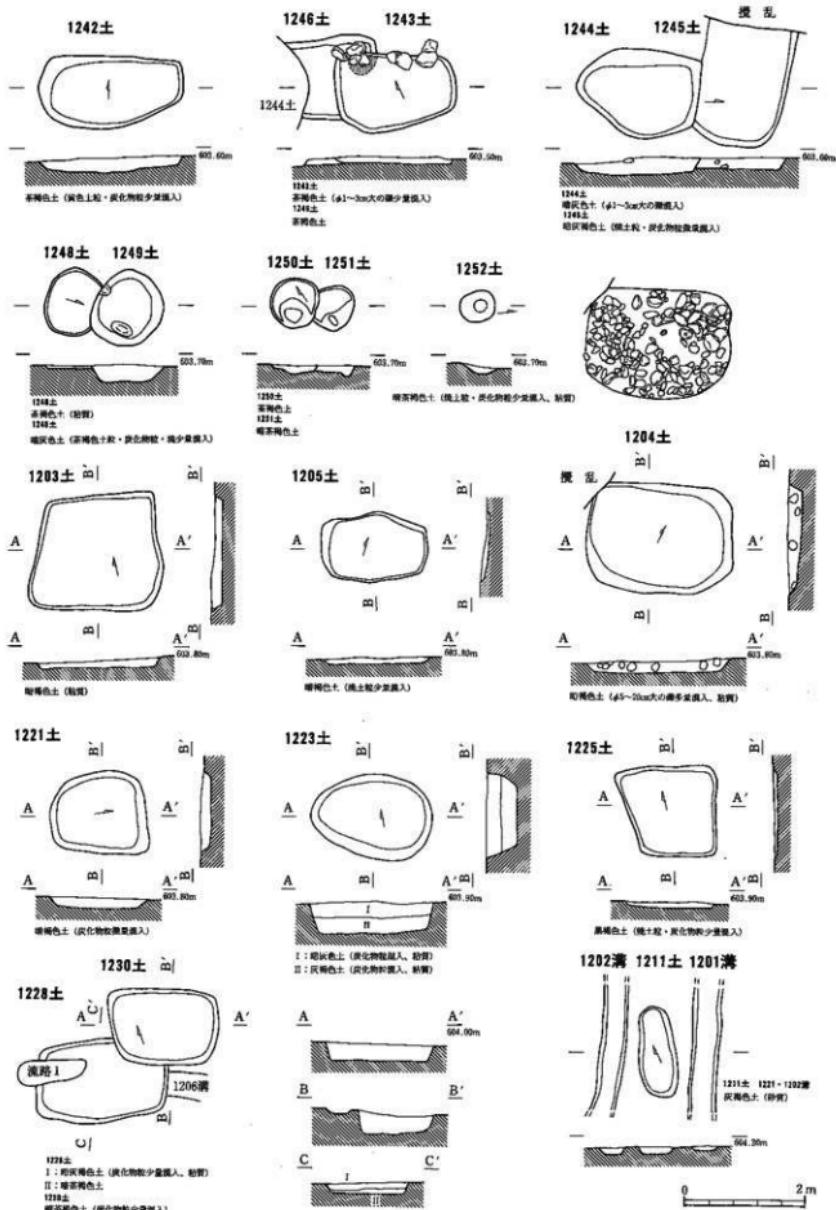
第10図 第121・123・126・128・129・130・132・133・135号住居址



第11図 第124・125・131・134・136・137号住居址、第3号掘立柱建物址、堅穴状造構、溝址、流路址



第12図 土坑(1)



第13図 土坑(2)・溝跡

第3節 遺物

1 土器・陶磁器（第14～21図、第5表）

今回の調査によって出土した遺物は、整理用テンバコ22箱を数え、弥生時代・平安～中世の多量の良好な資料を得ることができた。それらのうち図化し得たものは、土器、陶磁器は377点である。ここではそれらの様相について述べていく。

A 弥生時代の土器

今回の調査では、弥生時代の明確な遺構を捉えることはできなかった。しかし、第1章で述べたように洪水の常襲地でありながらも、この地に弥生時代の遺構が存在した証明として、若干はあるが遺物が出土している。

図化し得たものは101住の2点（12、13）で、12は外面に波状文、13は外面に簾状文及び波状文が施文され、口縁には繩文が施される（13は磨耗）。いずれも壺或いは台付壺とみられ、弥生時代中期末に属すると考えられる。

そのほかにも、図示し得ないが、調査区全域から、該期の土器片が出土している。

B 平安時代の土器

種別・器形

種別には土師器、黒色土器、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、輸入陶磁器（白磁・青磁）、国内産陶器などがある。出土した土器・陶磁器類の大半を占めている。堅穴住居址覆土中からの出土が多い。以下では項末記載の参考文献（註1）に従って種別に器形を述べていく。

土師器

123点図化した。器形には杯A、椀、盤B、壺類（壺B、小型壺D、羽釜D、甑D）などがみられる。

杯A

クロコ成形、底部回転糸切り、無高台の土師器で、8期以降に出現する。39点図化した。杯A IIと杯A IIIの2つの法量があり、杯A IIは黒色土器A杯Aの法量を受け継ぐもので、8期に出現する。今回の調査では、116住で4点（145、146、147、148）、107住で6点（74、75、87、88、89、90）、121住で9点（202、203、204、205、207、209、210、211、213）と多くみられ、119、127住でも確認できる。116住では口径平均13.13cm、器高平均4.05cmである。13期では口径9.94cm、器高2.7cmである。15期では口径8.9cm、器高1.96cmである。時間の経過とともに口径、器高を減じていく傾向があるといえる。

杯A IIIは、A IIが小型化していく過程で、12期に出現する器形である。該期以降の、107住で3点（73、91、92）、121住で1点（208）みられる。これらの平均は、口径で13.79cm、器高で4.09cmである。

皿

手捏ねの、いわゆる中世のかわらけに類するものを1点（329）図化しているが、グリッド調査によるもので、遺構に伴うか不明であるため、意義について述べることはできない。ただ今回調査において、その他に東海系無釉陶器山茶碗、施釉陶器鉢皿などの中世遺物が出土しているため、中世遺構の存在を想起させる資料となりうるものである。

椀

クロコ成形、底部回転糸切り、付高台の土師器である。9～15期の土器群にみられる。今回の調査では、概期の遺構が少ないとまか全体として出土量も少なく、9点を図化したのみである。また、小破片が多く、總体としての規模を明らかにできるものが少ないとまか、ここで法量等について述べることは困難である。

盤B II

クロコ成形、底部回転糸切り、付高台の土師器である。身部が浅く足高の高台をもつ、口径10cm前後のものである。11期以降に出現する。1244土出土の1点（294）を図化したのみである。

壺類には壺B、小型壺B、小型壺D、羽釜A、甑D、円筒型土器がある。

壺B

壺Bは、粘土紐積上げで成形し、体部外面をハケメで調整した長胴壺で、1期から10期にかけてみられる煮炊具の代表的なものである。8期以降は急速に減少していき、10期ではほとんどみられなくなる。今回の調査では37点出土している。7、8期の住居址ではカマド付近を中心に多くみられる。102住（14、37、38、39、40）、104住（50）、105住（53、54）、109住（103）、110住（116、117、118）、102住（14）で出土している。しかし全体の規模のわかるものは少ない。高さは31.2～32.2cm（4点）で平均31.65cm、底径は8.4cm～11.4cm（9点）で平均9.97cmである。

小型壺

小型壺Bは、壺Bと同様で体部をハケメ調整するものであるが、1期から5期までしかみられない。今回は122住(220)で確認されたが、住居址の時期からみて混入と考える。小型壺Dはロクロ成形で体部にカキ目、ロクロ目がみられ、口径と器高の比が1:1になる壺である。370を除いて外面にカキ目がみられる。4期から15期までみられるものである。今回の調査では7、8期のものを15点図化し、口径9.6~13.4cm、器高9.3~9.4cmである。

7期のものは105住(55)、117住(154、155、157)、118住(197)、122住(223、224、225、226)で出土している。224は全体のわかるもので口径10.8cm、器高9.3cmである。

8期のものは102住(15)で1点みられるが、底部のみで、全体は明らかでない。

今回の調査では、13~15期の住居址から、小型壺の出土はみられない。

羽釜

羽釜Dは指ナデ、ハケ目、板状工具によるナデなどが器面にみられる壺で、鋤部が口縁部下にみられる。羽釜は11期に出現する。今回の調査では13期の107住(86)から1点出土しているのみである。

瓶

瓶Dがみられる。瓶Dは、羽釜の底部を抜いた形を呈するもので、11期に出現する。今回の調査では、14期の119住から2点(200、201)出土している。201は全体のわかるもので、底部に輪積み痕があり、口縁部はロクロナデ成形をされる。鋤は巾1.2cmほどのものが貼り付けられている。

円筒型土器

口径は12cm前後、胴部はそれより一回り太い円筒状の土器で、体部外面には縦方向のハケメが施される。底部は内側に折り返すようしている。全体として規模のわかる資料は少ない。5~8期において、主としてカマド周辺で出土がみられるところから、煮炊きに関連して使用されたものとみられている。

今回の調査では9点出土している。7期の住居址からは1点ずつ、117住(161)、122住(222)でみられた。8期の住居址では102住(16、17、18、19)、116住(142、143、144)と複数出土している。出土位置について、116住のものはいずれもカマドとみられる周辺であるが、その他については一定しない。法量について、全体の規模のわかるものは皆無である。7期のものは、161が底径9.8cm、222が口径11.4cmである。8期のものは、口径が11.2~14.0cmで平均が12.55cm、底径がわかるものは144で10.8cmである。器高のわかるものは存在しない。

黒色土器

内面および外外面に黒色処理をするロクロ成形の土器である。器形には杯A、椀、鉢、皿がある。また今回の調査では小型壺、ミニチュアがみられる。内面のみ黒色処理を行う黒色土器A、外外面とも黒色処理を行う黒色土器Bがある。底部は回転糸切り痕、ナデ痕を持つ。黒色処理前にミガキが施される。黒色土器Aは123点、黒色土器Bは4点図化した。

杯A

無高台の黒色土器で、法量によりI、IIがある。4~8期においてみられる。今回の調査では黒色土器Aのみである。51点図化し、うち43点が住居址内からのもので、7~8期の住居址において多くみられる。A Iは、7期の105住(58)、110住(114)、114住(131、133、134)、117住(164、167、168、172)、122住(233)と数量的にはあまり多くないが、特に114住、117住ではA I、A IIの両者ともにみられる。法量は口径15.5~19.4cmで平均16.8cm、器高5~7.2cmで平均5.56cmである。8期の住居址ではみられない。

A IIは、7期の住居址では99住(1、2)、104住(56、57)、110住(105)、113住(126)、114住(129、130、132)、117住(165、166、169、170、171、180)、122住(234、235、236、237)とみられ、口径は11.6~13.95cmで平均12.99cm、器高は3.3~4.7cmで平均3.99cmである。8期の住居址では非常に少なく、100住(9)、102住(20、22、23)と4点出土しているのみで、法量も一定しない。

椀

付高台の黒色土器である。7~15期においてみられる。黒色土器A、黒色土器Bがある。口径12.8~17.6cm、器高4.7~7.7cm、口径10cm前後の小椀もみられる。42点図化した(A:41点、B:1点)。

黒色土器Aは7期の99住(3、4)、105住(62)、110住(106、110、115)、117住(178、179、181、190、191)、118住(193)、122住(230、231、238、239)、123住(251)で出土している。8期では100住(10、11)、102住(25、26、27、28、29)、109住で出土している。13期では107住(79、80、81、82、83、84、95、96)で出土がみられる。しかし、いずれも全体形がわかるものは少なく、法量については口径についてのみ述べておく。7期では12.8~17.6cmで

平均16.75cm、8期では14.0~16.8cmで平均15.36cmである。13期では、13.4cm、14.0cmのもの他、8.8cm、9.8cm、10.8cmという小柄がみられる。

黒色土器Bはグリッド調査で碗が1点(308)がみられるのみで詳細については不明である。

鉢A

杯Aと相似であるが、口径20cmを超えるものを鉢Aとした。5~9期に存在する。今回の調査では7期の110住(113)、117住(156)、122住(228)と、遺構内からは3点のみである。また口径についても228と、トレンチ出土の341のみ(それぞれ口径22.4cm、34.0cm)と、全体形のわかるものは少ない。他は推定値が20cmを超えるものであるため、法量について詳しく述べることはできない。

皿B

直線的に伸びる体部に高台をつけるもので、内面又は両面を丁寧にヘラ磨きし、黒色処理するもので、7~8期にみられる。黒色土器A、Bとともにみられる。

黒色土器Aは、7期の114住(135、136)、117住(173、174、175、177、182)、122住(229、232、240)、8期の128住(263)でみられ、特に117住ではまとめて出土している。法量は口径が12.2~14.4cmで平均が13.31cm、器高が2.3~3.15cmで平均が2.88cmである。

黒色土器Bは2点みられ、7期の117住(176)、123住(249)である。いずれも全体形の判るもので、法量はそれぞれ口径が13.8cm、13.15cm、器高が2.6cm、1.65cmである。

小型壺

99住(5)、1228土(291)の2点みられ、いずれも黒色土器Aである。5は外面ロクロナデされたため小型壺Dとした。291は内外面ともミガキ調整される。詳細については不明な点が多い。

ミニチュア

短頸型のミニチュア(361)が1点、検出面から出土している。調整は、外面はミガキされるが、内面はナデのみで、ミガキはされず黒色処理がされている。遺構からの出土ではないため、用途について述べることはできない。

須恵器

選元焰焼成による硬質灰色土器で、ロクロ調整と窯による焼成によっている。器形には杯A、杯B、杯蓋B、壺類、壺類、また陶硯として風字硯がある。70点図化した。

杯A

1~7期にみられる。今回の調査では36点みられ、そのうち23点が住居址覆土からで、102住(34)が8期のものである以外は全て7期の住居址からの出土である。104住(46、47)、110住(109)、111住(120、121)、113住(127)、117住(183、184、185、187)、118住(194、195、196)、122住(241、242、243、244、245)、123住(252、253、254、255)でみられ、法量は口径が12.0~13.4cmで平均が12.79cm、器高が2.8~4.4cmで平均が3.47cmである。

杯B

箱形の体部に高台を付けた形態で、杯Bとセットをなす。法量によりIからVIに分類される。杯Aと同様、1~7期にみられる。今回の調査では8点図化したが、底部高台部分の残存により杯Bと判断したものが全てである。底径からある程度の規模を考えられるものもあるが、全体のわかるものは皆無であり、法量による分類は難しい。

杯蓋B

杯Bとセット関係にあるもので、杯Bと同様、法量によりIからVIに分類される。今回の調査では7点図化し、口径の明らかなものは105住(71)、111住(122)、トレンチ(345)の3点のみで、住居址のものはいずれも7期に属する。71はBIVで14.0cm、122はBIVで14.9cm、345はBIIかIIIで15.6cmとなる。

壺類

長頸壺がある。今回の調査で壺類は7点出土している。明らかに長頸壺とみられるものは3点で、102住(35)、122住(247)、123住(256)である。いずれも球形胴に細い頸部が付く長頸壺Aである。他は明らかに器種を判断しがたい。このうち全体のわかるものは256で、器高は23.35cm、体部径19.1cmで、肩部に取手が1つ付くタイプである。

壺類

今回の調査では4点図化した。いずれも規模を明らかにできるものはない。102住(36)のものは、肩部から胴部にかけて強く張り出した体部に外反する口縁部を付けた壺Aとみられるが、体部と口縁部の接合部のみで、全体の規模をうかがい知ることはできない。114住(139)、グリッド(317)の2点は、壺Aの可能性があるが明らかではない。

風字硯

中世以降の石製硯と異なり、古代においては焼き物の硯、即ち陶硯が主体を占める。風字硯は陶硯の一種で、平面形が「風」という字の形に相似するため、その呼称を持つ。今回出土のものは、114住（128）の1点で、海部側が残存し、裏面には貼り付けの脚が1つ残存している。全体の規模は明らかではないが、内面には墨痕及び使用痕がみられる。外側の調整は、側面が工具ナデ、底面は一部未調整の他はヘラ削りされる。

軟質須恵器

須恵器の一種であるが、須恵器に比して低温で焼成されるため、灰白色軟質を呈する。器形は杯Aのみで、7～8期のみ確認されるものである。8点図化した。住居址からの出土は、7期では110住（112）、129住（267、268）、8期では102住（32、41、42）、109住（101）、116住（149）である。この土器は、ほとんどが内外面に黒斑があるとされるが、今回のものはいずれもそれが顕著ではない。法量は、口径が12.8～13.85cmで平均13.24cm、器高が3.75～4.15cmで平均が3.91cmである。

灰釉陶器

ロクロ成形で器面に灰釉のかかる硬質の陶器である。7期に出現する。器形には碗、皿類（皿、段皿）、瓶類（小瓶、長頸壺）がある。今回の調査では31点図化したが、大半は碗、皿類の食器具で、貯蔵具の瓶類は2点と少ない。初期の黒縁14号窯式のものが4点（102住33：皿、105住65：碗、グリッド326：皿、検出面367：碗）みられる。

碗

ロクロ成形、付高台、外面下半には回転ヘラ削りが施されるものもある。外面底部には回転ヘラ削り痕、ナデ痕、回転糸切り痕などがみられる。17点を図化した。

7期では105住（65、66、68）、111住（119）、118住（198）で出土している。全容のわかるものは119と198で、あるが、2点とも潰け掛け施釉のため混入とみられる。198は内外面に漆が付着している。8期では116住（151、152）で出土している。いずれも全体の明らかかなものはない。14期では135住（276、277）でみられるが、いずれも底部のみであり、全容は不明である。15期では121住（215）があるが、底部の小破片のため詳細についてはわからない。

皿類

ロクロ成形、付高台、外面下半には回転ヘラ削りが施されるものがある。外面底部には回転ヘラ削り痕、ナデ痕、回転糸切り痕などがみられる。皿と段皿がある。11点図化した。

7期では99住で皿が1点（8）、段皿が1点（7）、105住で皿が1点（67）出土している。いずれも全容がわかるものではない。口径は12.4～16.5cmである。8期では102住（33）と109住（99）で、いずれも皿で、口径が15.4～15.6cm、器高が2.3～3.1cmである。13期では107住（85、97）でいずれも段皿である。口径は12.2～12.8cm、器高が2.3～2.4cmで、7～8期のものに比して口径は小さい。

瓶類

1221土の287は、長頸壺とみられるものの底部である。内面も施釉されている。高台は付高台である。1243土の293は、小瓶とみられるものの口縁部である。口唇部のみ施釉されている。いずれも全容は明らかでない。

綠釉陶器

7点出土している。このうち小破片1点を除いた6点を図化した。器形には碗、皿、杯、三足盤がみられる。いずれも一部分で、器形という点で述べることのできるものは非常に少ない。しかし特殊なものはみられる。104住（45）は緑彩文陶碗、117住（153）は三足盤脚部、1223土（289）は刻書土器杯である。

緑彩文陶（45）

104住出土である。底部のみ残存している碗である。内面はミガキ、底面はヘラ削りの後に両面施釉される。有段高台であることから近江窯とみられる。内面見込部に4弁の花の模様（緑彩文花）が施されることから、緑彩文陶と呼ばれるもの的一種であるが、北葉遺跡SB127（註2）或いは第4次調査検出面（註3）などでみられるような、生地に花文を刻んだ後に緑釉を施す陰刻花文ではなく、釉薬の濃淡によって描かれているもので、類例として多賀城跡（宮城県）、上総国分尼寺（千葉県）、更埴条里遺跡・恒川遺跡・和手遺跡（長野県）、八事堂跡（愛知県）、斎宮跡（三重県）等でみられる（註4）。

三足盤（153）

117住貼床下出土である。名古屋市八事堂跡出土の二彩三足盤に類似するものの脚部とみられる破片である（註5）。軟質で、ヘラ削りの後に淡緑色の施釉がされ緻密な造りとなっている。体部はほとんど残存せず脚部のみであ

る。脚部の断面形は八角形を呈する。先端部は外側に刻みがあり、その部分にも八角形の稜線が続いている。出土位置が住居址貼り床の下であるためその意義について述べることはできないが、類例は少なく希少なものではあろう。

刻畫土器 (289)

1223土出土の杯である。底部のみ残存する。高台は円盤状削り高台で、内面はミガキ、底面は回転ヘラ削りの後に淡緑色の施釉がされる。また底面には「真」とみられる文字が、施釉後に刻まれている。京都産とみられる。

(2) 出土土器群

今回の調査では古代7、8期の他、13~15期までの土器群がみられる。以下、各期土器群の組成と特徴をみていく。

7期の土器群

99住、103住、104住、105住、109住、110住、111住、117住、118住、122住、123住、129住がある。今回の調査で最も多くみられる土器群である。器種は土師器、須恵器、軟質須恵器、黒色土器A、灰釉陶器で構成される。

食器：土師器椀・鉢・高杯、須恵器杯A・杯B・杯蓋、軟質須恵器杯A、黒色土器杯A・椀・鉢A・皿、灰釉陶器皿・段皿・椀、綠釉陶器皿がみられる。

煮炊具：土師器壺B・小型甕B・小型甕D・円筒型土器がみられる。

貯蔵具：須恵器長頸壺A・甕D、陶器壺がみられる。

特殊品：須恵器風字甕、綠釉陶器綠彩文陶・三足盤がみられる。

土師器杯或いは椀、高杯、甲型甕杯が104、105、129住でみられるが、混入品の可能性がある。食器の主体は須恵器杯A（22点）、黒色土器杯A（34点）、椀（18点）と多くを占めるが、今回は黒色土器皿も10点と比較的多い。黒色土器杯Aは大小二法量（I、II）あり、口径15cm、器高5cmを超える大型のIが10点（平均口径16.76cm、器高5.59cm）、小型のIIが21点（平均口径12.97cm、器高4.19cm）みられ、比率はほぼ1:2である。灰釉陶器もみられるが、小破片が多いため判然としない。105住出土の65は黒窓14号窓式の碗である。煮炊具では甕B（21点）、小型甕D（10点）が主体を占める。ハケ目の施される小型甕Bは混入であろう。甕Bは全体のわかるものは少ない。器高は31cm台、底径は9cm台だが、底径11cmのもの（116、266）もある。小型甕Dは全て外面にカキ目がみられる。円筒型土器が117住、122住から出土しているが、U縁部のみと底部のみであり、全体形については不明である。出土位置もカマド周辺というわけではなく、また煤などの付着がないことから煮炊具と判断できず、用途は不明といわざるを得ない。貯蔵具は長頸壺Aがあり、123住の256は全体がわかるものである。特殊品については前述しているため省略する。

8期の土器群

100住、102住、116住、125住、126住、127住、128住がある。7期に次いで多くみられるが、102住がその主体を占める。器種は土師器、黒色土器A、灰釉陶器、綠釉陶器で構成される。

食器：土師器杯A・椀、黒色土器A杯A・椀・皿、須恵器杯A、灰釉陶器椀、皿がみられる。

煮炊具：土師器壺B・小型甕D・円筒型土器がみられる。

貯蔵具：須恵器長頸壺・甕A、壺頸がみられる。

食器類では土師器杯Aが出現する。7点みられ口径平均12.64cm、器高平均3.83cmである。他には黒色土器A杯A、椀が多くみられる。灰釉陶器は3点と数量的には少ない。煮炊具では土師器甕B・小型甕Dがみられる。甕Bは底径が9.4~11.4cmで、7期のものより底径は大きくなるが、全体のわかるものは102住の40のみである。小型甕Dは15にカキ目がみられる。7期に引き続き円筒型土器が102住、116住から出土している。貯蔵具は102住に須恵器長頸壺A（35）、116住で壺頸（150）がみられる。

13期の土器群

67住が該当する。器種は土師器、黒色土器、灰釉陶器、白磁で構成される。貯蔵具はみられない。

食器：土師器杯A・椀、土師器甕B、黒色土器A椀、灰釉陶器段皿、白磁がある。

煮炊具：羽釜Aがある。

土師器杯AにはA IIとA IIIの2法量みられる。A IIは5点で口径平均9.94cm、器高平均2.7cmである。土師器杯A IIIは3点出土しており、口径13.1~13.8cm、器高4.0~4.35cmである。椀は1点のみである。黒色土器A椀は8点みられるが、全体のわかるものは96のみである。白磁皿（98）は口縁のみの小破片である。灰釉陶器皿類は全て段皿である。煮炊具は羽釜Aが1点（86）みられる。

14期の土器群

119住、135住がある。器種は土師器、灰釉陶器で構成される。貯蔵具はみられない。

食器：土師器杯A II、灰釉陶器椀がある。

煮炊具：壺Dがある。

土師器杯AはA II 2点のみでA IIIはみられない。口径は8.2cm、9.55cm、器高は1.8cm、1.5cmである。灰釉陶器碗は2点みられるが、いずれも底部のみで朱墨痕があることから、転用窯として用いられたと考える。煮炊具は壺Dが2点みられ、119住の1点(201)は全体のわかるもので、底部に輪積み痕があり、口縁部はロクロナデ成形をされる。鈴は巾1.2cmほどのものが全周に貼り付けられていたとみられる。

15期の土器群

121住が該当する。器種は土師器、灰釉陶器で構成される。貯蔵具はみられない。1点土師器壺が出土しているが、古墳時代中期に属するもので、混入とみられる。

食器：土師器杯A II、杯A III、碗、灰釉陶器碗がある。

煮炊具：土師器壺

土師器杯AにはA IIとA IIIの2つの法量があるが、杯A IIIは1点(208)しかみられない。土師器杯A IIは口径平均8.88cm、器高平均1.96cmである。灰釉陶器碗(215)には高台に鈴い痕がある。煮炊具は壺とみられる器形のものが1点(214)出土しているが、底径が16cmと大きいことから、鍋といったほうがいいかもしれない。

(3) 文字関係資料

6点出土している。いずれも平安時代の土器である。墨書は117住の須恵器杯蓋1点(192)のみであるが、文字部分の大部分が欠失しているため、文字は不明である。刻書は1223土の綠釉陶器杯(289)で、底部に「真」と刻まれている。ヘラ記号とみられるものは検出面の須恵器杯B 1点(366)のみである。器面に墨痕のあるものは2点出土した。いずれも135住出土の灰釉陶器碗(276、277)で、朱墨が付着している。114住では須恵器風字硯(128)が出土しているが、これについては前述しているのでここでは省略する。

C 中世以降の土器・陶磁器

器種には輸入陶磁器、土師器、陶器などがある。19点出土している。このうち10点図化した。

輸入陶磁器

青磁・白磁がみられ、青磁が6点、白磁が7点出土しているが、小破片が多く、図化できるものは少ない。器形としては碗、皿類が多く見受けられる。図化し得たものは白磁3点である。このうち遺構に伴うものは2点で、107住(98)、1222土(288)で出土している。98は玉縁口縁の皿とみられる小破片である。288は小壺で、外面は光沢のある強いミガキが施される。グリッド調査の328は皿とみられる口縁部の小破片である。これらの時期は、古代14~15期(11~12世紀代)から中世にかけてであるとみられる。

土器・陶器

遺構内からの出土は少ない。129住出土の灰釉丸碗(272)は瀬戸・美濃産の江戸時代17世紀後半に属するもので、後世の混入品である。1226土出土の陶器鉢皿(290)は東海系施釉陶器で中世II期15世紀後半の室町時代に属するものと考える。今回の調査では表土直下の面を中世に属する第1面としたが、一部の土坑、溝以外の遺構を明瞭に捉えることができなかつたため、グリッド調査により遺構・遺物の確認を行った。その過程で多くの遺物を回収し、そのうち図化し得た中世の土器・陶器は、土師器皿(329)、陶器壺あるいは壺(330)の2点である。329は精緻に手捏ね成形されるいわゆるかわらけで、中世I期13世紀の鎌倉時代に属するものと考えられる。330は常滑産で、壺か壺とみられるものの口縁部である。その他には東海系無釉陶器の捏ね鉢、山茶碗がみられる。

まとめ

今回の調査では、平安時代前期を中心に多くの遺物の出土がみられたが、一部残存した弥生時代の遺物も出土している。中世の遺物もそれほど多くはないが出土がみられたため、中世遺構の存在を示唆する資料を得ることができたといえる。また緑彩文陶などの特殊遺物は、この遺跡の特殊性を示すものであるといえる。

註1 長野県埋蔵文化財センター 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4」松本市内その1 総論編

註2 長野県埋蔵文化財センター 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8」松本市内その5 北栗遺跡

註3 松本市教育委員会 1990「松本市文化財調査報告書No.82」松本市保原町遺跡 -緊急発掘調査報告書-

註4 五島美術館 1998「天平に咲いた華 日本の三彩と縁物」「特別展天平に咲いた華 日本の三彩と縁物」図録

註5 中央公論社 1989「日本の陶磁 古代中世篇2」三彩 縁物 灰釉

第5表 土器觀察表

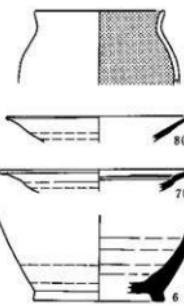
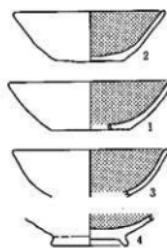
No.	地點・採取	實測	標記	測量(m)			測量法	圖版	備考	測量日
				高さ	幅員	延長				
81	107SW.S	黑A	燒	(8.8)			1/16	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、付高台後ナデ		107-9
82	107SW.N	黑A	燒	(19.9)			1/6	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		107-10
83	107EN4	黑A	燒		5.1		ロクロナデ、回転系切、内面ミガキ後黒色處理			107-11
84	107EN3	黑A	燒		8.9		ロクロナデ、回転系切、内面ミガキ後黒色處理			107-12
85	107EN2	灰	燒炭	(12.2)	(7.6)	2.3	口1/2 圖版1/8	ロクロナデ、西軸ヘタケズリ、付高台後ナデ、 横け付け無		107-13
86	107EN3	土	引葉D	24.96			口1/2	1面開ナシ、内面ロクロナデ後ハケメ、 横け付け無		107-14
87	112EN3-Bヘルト	土	杯AⅢ	(9.3)	(5.2)	(2.3)	口1/4 圖版1/2	ロクロナデ、回転系切		112-1
88	112EN3	土	杯AⅢか		5.6		ロクロナデ、回転系切			112-2
89	112EN4	土	杯AⅢ	19.3	5.9	2.7	LJ- 駆矢 佐美	ロクロナデ、回転系切		112-3
90	112EN3	土	杯AⅢ	19.4	4.7	3.0	LJ- 駆矢 佐美	ロクロナデ、回転系切		112-4
91	112EN-Nベルト	土	杯AⅢ	(13.1)	5.45	(4.0)	口1/6 圖版1/4	ロクロナデ、回転系切		112-5
92	107SW.S	土	杯AⅢ	19.7	5.7	4.35	口一部 葉室	ロクロナデ、回転系切		112-6
93	112EN1	土	側A	(15.4)			口1/6 葉室	ロクロナデ、回転系切、付高台後ナデ、 横け付け無	内面免込部屋付着	112-7
94	112EN11	土	側A		7.3		羅	ロクロナデ、回転系切	高台内外面保付着	112-8
95	112EN10	土	側A		7.7		羅	ロクロナデ、回転系切、内面ミガキ後黒色處理、 付高台後ナデ	暗文有	112-9
96	112EN2 横	黑A	燒	(14.0)	7.3	(5.25)	口3/8 葉室	ロクロナデ、回転系切、内面ミガキ後黒色處理、 付高台後ナデ		112-10
97	112EN2、107 横	灰	段鉄	12.6	7.0	2.4	口3/4 圖版1/2	ロクロナデ、回転系切、行高台後ナデ、横け付け無		112-11
98	109EN3-S	土	側B	(15.3)			1/1/16	ロクロナデ		112-12
99	109EN3-E	土	側B	(5.4)	(7.8)	(3.1)	口1/5 圖版1/8	ロクロナデ、回転系切、行高台後ナデ、横け付け無		112-1
100	109EN2	黑A	側A	(16.4)	6.4	(5.3)	口1/4	ロクロナデ、回転系切、内面ミガキ後黒色處理、 付高台後ナデ		109-2
101	109EN1	灰	杯A	13.3	6.0	3.9	口3/8 烟室	ロクロナデ、回転系切		109-3
102	109EN5W	黑A	杯A	(6.2)			口1/4	ロクロナデ、回転系切、内面ミガキ後黒色處理		109-4
103	109EN5E	黑A	杯A	(21.0)			口1/4	ロクロナデ、外側ハーフ、内面ミキ、ナデ		109-5
104	109EN5	黑A	杯A	(16.6)			口1/4	ロクロナデ		109-6
105	110ENカマド	黑A	燒	(8.8)			ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		110-1	
106	110ENカマド	黑A	燒	(17.6)			ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		110-2	
107	110ENカマド	黑A	燒	(14.8)			ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		110-3	
108	110EN2	黑A	燒	(17.8)			ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		110-4	
109	110ENNW	黑A	杯A	(12.6)	(5.8)	(3.6)	口1/8 圖版1/4	ロクロナデ、回転系切		110-5
110	110EN2	黑A	燒		6.8		轟1/4	ロクロナデ、回転系切、内面ミガキ後高台後。		110-6
111	110EN2	黑A	燒				付高台後ナデ			110-7
112	110EN2	黑A	燒	(12.8)	6.6	3.8	口1/4 葉室	ロクロナデ、回転系切		110-8
113	110EN2	黑A	燒				轟1/2	ロクロナデ、回転系切		110-9
114	110EN2-SW	黑A	杯A I	(19.4)	(9.0)	(5.3)	口1/2 圖版1/3	ロクロナデ、回転系切、内面ミガキ後黒色處理	内面部對み有	110-10
115	110EN2-E	黑A	燒	(13.9)			口1/2 圖版1/2	ロクロナデ、回転系切、内面ミガキ後黒色處理、 付高台後ナデ		110-11
116	110EN4,7,8,9	土	燒B	(31.9)	11.0	(31.3)	口1/2 圖版1/2	ロクロナデ、行ハマメ、ヘラケメリ、内面ミキ、ナデ		110-12
117	110EN4,5,7	土	燒B	(22.4)			ロクロナデ、外側ハーフ、内面ミキ、ナデ			110-13
118	110EN4,10	黑A	燒	(31.1)	9.0	5.9	口1/4 葉室	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		110-14
119	110EN2	黑A	燒	(17.6)	7.2	4.5	口1/4 葉室	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		110-15
120	110EN2-SW	黑A	杯A I	(18.6)	(7.0)	(3.4)	口1/6 圖版1/6	ロクロナデ、回転系切、内面ミガキ後黒色處理		110-16
121	110EN1	黑A	杯A	(6.0)			轟3/4	ロクロナデ、回転系切		110-17
122	111EN-Sベント	第	外輪IVか	(14.9)			ロクロナデ		内面自然物扱着	111-1
123	111EN3	黑A	燒				ロクロナデ、付高台後ナデ	内面系統物扱着	111-2	
124	111EN2-NW	土	燒B	(22.2)			ロクロナデ、外側ハーフ、内面ミキ、ナデ	内面系統物扱着	111-3	
125	111EN2-S	黑A	燒	(16.6)			ロクロナデ、外側ハーフ、内面ミキ、ナデ	内面系統物扱着	111-4	
126	111EN2-Tレシナ	黑A	杯A I	(13.95)	6.6	4.3	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-5	
127	111EN2-Tレシナ	黑A	杯A I	(6.4)			ロクロナデ、回転系切		111-6	
128	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-7	
129	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-8	
130	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-9	
131	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-10	
132	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-11	
133	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-12	
134	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-13	
135	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-14	
136	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-15	
137	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-16	
138	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-17	
139	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-18	
140	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-19	
141	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-20	
142	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-21	
143	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理		111-22	
144	111EN2-NL	黑A	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 付高台後ナデ		111-23	
145	111EN6,11,12	土	杯A II	(13.4)	5.8	4.1	ロクロナデ、回転系切			111-24
146	111EN6,12	土	杯A II	(32.0)	6.0	5.8	ロクロナデ、回転系切			111-25
147	111EN6,12	土	杯A II	(32.0)	6.0	3.5	ロクロナデ、回転系切			111-26
148	111EN6,12	土	杯A II	(32.0)	7.2	3.5	ロクロナデ、回転系切			111-27
149	111EN6,12	土	杯A II	(32.0)	5.8	3.8	ロクロナデ、回転系切			111-28
150	111EN3,4,16	土	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 高台一部火	外側上部自然物扱付着 高台一部塔ル付着	111-29	
151	111EN3,4,16	土	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 高台一部火	外側自然物扱付着 外側自然物扱付着	111-30	
152	111EN3,4,16	土	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 高台一部火	外側自然物扱付着 外側自然物扱付着	111-31	
153	111EN3,4,16	土	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 高台一部火	外側自然物扱付着 外側自然物扱付着	111-32	
154	111EN3,4,16	土	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 高台一部火	外側自然物扱付着 外側自然物扱付着	111-33	
155	111EN3,4,16	土	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 高台一部火	外側自然物扱付着 外側自然物扱付着	111-34	
156	111EN3,4,16	土	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 高台一部火	外側自然物扱付着 外側自然物扱付着	111-35	
157	111EN3,4,16	土	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 高台一部火	外側自然物扱付着 外側自然物扱付着	111-36	
158	111EN3,4,16	土	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 高台一部火	外側自然物扱付着 外側自然物扱付着	111-37	
159	111EN3,4,16	土	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 高台一部火	外側自然物扱付着 外側自然物扱付着	111-38	
160	111EN3,4,16	土	燒				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色處理、 高台一部火	外側自然物扱付着 外側自然物扱付着	111-39	

No	出土地点・性状	種別	深度(cm)			腐存度	調査	備考	測量員	
			日付	地質	高さ					
160	117E6N28	土	黒B	(20.4)	5.5	口3/4	口ヨコナメ、外側ハツメ、内側カキメ、ナデ	117-8		
161	117E6N28-N	土	黒B	黒土層	(9.8)	口3/4	外側ハツメ、内側カキメ、ナデ	117-9		
162	117E6N28	土	黒A	(16.2)	5.5	口3/4	外側ハツメ、内側カキメ	117-10		
163	117E6NW8	土	黒A	(12.0)	5.5	口3/4	外層カキメ、内側カキメ、ナデ	117-11		
164	117E6NW1	土	黒A	16.0	7.2	5.5	口3/4 肉厚	口ヨコナメ、外側ハツメ、内側カキメ黒褐色	117-12	
165	117E6ペルト	土	黒AII	(15.6)	6.4	口3/4 肉厚/2	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄	117-13		
166	117E6S_NB8	土	黒A	(13.0)	6.5	4.6	口3/4 肉厚	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄	117-14	
167	117E6S_NE8	土	黒A	(15.8)	7.0	5.6	口1/4 肉厚/5	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄	117-15	
168	117E6NE8	土	黒A	16.0	7.0	5.6	口1/4 肉厚/4	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄	117-16	
169	117E6N28_2	土	黒A	(12.0)	6.0	4.5	口3/4 肉厚/3	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄	117-17	
170	117E6ペルト	土	黒A	14.0	6.0	4.7	口3/4 肉厚	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄	117-18	
171	117E6マド	土	黒AII	13.9	7.0	3.5	口3/4 肉厚	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄	117-19	
172	117E6NW22_N	土	黒A	18.5	8.0	7.2	口3/2 肉厚	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄	117-20	
173	117E6N3	黒A	黒B	14.4	6.9	3.3	L1/2 肉厚	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄、付高石炭ナメ	117-21	
174	117E6N24	黒A	黒B	13.4	6.6	3.1	口1/2 肉厚	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄、付高石炭ナメ	117-22	
175	117E6N16	黒A	黒B	(13.6)	6.2	3.0	口1/3 植物層	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄、付高石炭ナメ	117-23	
176	117E6N16	黒A	黒B	13.8	7.3	2.6	L1/2 肉厚	内側ミガキ後黑色地獄、高一層ナメ	117-24	
177	117E6S	黒A	黒B	(13.4)	6.2	2.7	口1/2 肉厚	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄、付高石炭ナメ	117-25	
178	117E6S	黒A	黒	(16.6)			L1/4	口ヨコナメ、内側ミガキ後黑色地獄	117-26	
179	117E6N6	黒A	黒	(15.6)			口ヨコナメ、内側ミガキ後黑色地獄	117-27		
180	117E6マド	黒A	黒AII	(12.8)	(6.0)	5.9	口1/4 肉厚/3	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄	117-28	
181	117E6	黒A	黒	16.0	7.1	5.6	口1/6 肉厚	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄、付高石炭ナメ	117-29	
182	117E6マド	黒A	黒B	(12.6)			口1/6 肉厚	口ヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄	117-30	
183	117E6NW28	黒A	黒A	12.3	5.9	3.2	口2/3 肉厚	口ヨコナメ、回転糸糸	117-31	
184	117E6N27	黒A	黒A	(13.2)	(5.6)	4.3	口1/6 肉厚	口ヨコナメ、回転糸糸	117-32	
185	117E6N3	黒A	黒A	(13.4)	(5.0)	3.3	ロ-部 肉厚/2	ロ-ヨコナメ、回転糸糸	117-33	
186	117E6マド	黒A	黒B	(20.4)			ロヨコナメ	ロヨコナメ	117-34	
187	117E6NW28	黒A	黒A	(13.0)	(6.0)	3.6	ロヨコナメ 肉厚/3	ロヨコナメ、回転糸糸	117-35	
188	117E6N14	黒A	黒B	(6.6)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、付高石炭ナメ	117-36	
189	117E6NW28	黒	黒B	(14.1)			ロヨコナメ、天井部糸輪ヘラケズリ、つま先ひ付け後ナメ	117-37		
190	117E6N15	黒A	黒	(7.4)			ロヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄、付高石炭ナメ	117-38		
191	117E6NW28	黒A	黒	(6.2)			ロヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄、付高石炭ナメ	117-39		
192	117E6N11	黒	黒B				ロヨコナメ、天井部糸輪ヘラケズリ、つま先ひ付け後ナメ	黒茎有り	117-40	
193	118E6N27	黒A	黒	(12.6)	5.9	3.3	ロヨコナメ、回転糸糸、内側ミガキ後黑色地獄	118-1		
194	118E6N4	黒	黒A	12.6	5.9	3.3	ロヨコナメ	ロヨコナメ、回転糸糸	118-2	
195	118E6N3	黒	黒A	12.9	6.0	2.9	ロヨコナメ	ロヨコナメ、回転糸糸	118-3	
196	118E6	黒	黒A	(12.4)	(6.0)	(2.8)	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄	118-4	
197	118E6	黒	黒	(16.2)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	118-5	
198	118E6マド	黒	黒A	(7.0)	(5.5)	3.5	ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	118-6	
199	118E6S	黒	黒AII	(8.2)	(4.2)	(1.9)	ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	118-7	
200	118E6	黒	黒B	(27.6)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	118-8	
201	119E5_S_K	土	黒D	23.6	30.9	23.55	ロヨコナメ、外側ロヨコナメ。タキメ、内側カキメ、糸輪地獄付ナメ	内側糰付春	119-3	
202	121E6N27	土	黒AII	(9.2)	5.9	2.5	ロヨコナメ	ロヨコナメ、回転糸糸	120-1	
203	121E6N27_SW	土	黒AII	(9.1)	5.2	1.8	ロヨコナメ	ロヨコナメ、回転糸糸	120-2	
204	121E6N24	土	黒AII	8.5	4.9	1.6	ロヨコナメ	ロヨコナメ、回転糸糸	120-3	
205	121E6N4	土	黒AII	(9.3)	(5.3)	(5.0)	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄	120-4	
206	121E6N_Sペルト	土	黒A	(15.3)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ	120-5	
207	121E6N1	土	黒AII	(9.3)	(5.4)	(1.8)	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄	120-6	
208	121E6N3	土	黒AII	(14.5)	(6.2)	(3.7)	ロヨコナメ	ロヨコナメ、回転糸糸	120-7	
209	121E6N	土	黒AII	(9.9)	(6.4)	(1.7)	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄	120-8	
210	121E6NW上層	土	黒AII	(8.6)	(4.1)	(2.0)	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄	120-9	
211	121E6NW上層	土	黒AII	(8.9)	(4.9)	(2.0)	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄	120-10	
212	121E6NW上層	土	黒AII	7.9			ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄、付西台後ナメ	120-11	
213	121E6NW上層	土	黒AII	(8.6)	(4.7)	(2.3)	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄	120-12	
214	121E6N27層	土	黒C	(16.6)			ロヨコナメ	ロヨコナメ	120-13	
215	121E6N27	灰	灰	(8.8)			ロヨコナメ	ロヨコナメ	120-14	
216	122E6N13	土	黒B	(21.4)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄、付西台後ナメ、襷掛け脚輪地獄	120-15	
217	122E6N8_32	土	黒B	(23.0)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	120-16	
218	122E6カマF-2	土	黒B	(22.2)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	120-17	
219	122E6カマF-5	土	黒B	(20.6)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	120-18	
220	122E6カマF-1	土	黒A	(13.4)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	120-19	
221	122E6カマF-28	土	黒B				内側糰付ナメ	内側糰付ナメ	120-20	
222	122E6N12_16	黒A	内側糰上層	(11.4)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	120-21	
223	122E6カマF-9	土	小糰D	(9.6)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	120-22	
224	122E6カマF-7	土	小糰D	(10.8)	(6.4)	(9.3)	ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	120-23	
225	122E6カマF-27	土	小糰D	(13.2)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	120-24	
226	122E6NW下層	土	小糰D	(12.6)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	120-25	
227	122E6下層	土	小糰D	(16.0)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側カキメ、ナデ	120-26	
228	122E6NW下層	黒A	黒A	(22.3)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側ミガキ後黑色地獄	120-27	
229	122E6N10	黒A	黒B	(13.6)	7.2	2.6	ロヨコナメ	ロヨコナメ、内側ミガキ後黑色地獄、付高石炭ナメ	120-28	
230	122E6N14	黒A	黒	(15.2)	8.8	5.6	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄、内側ミガキ後黑色地獄、付高石炭ナメ	120-29	
231	122E6N17_18	黒A	黒	(13.2)			ロ-部 糜完	ロ-部 糜完	120-30	
232	122E6SW	黒A	黒B	(12.2)			ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄、内側ミガキ後黑色地獄	120-31	
233	122E6N24	黒A	黒AII	(16.0)	7.2	5.8	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄、内側ミガキ後黑色地獄	120-32	
234	122E6N13	黒A	黒AII	(13.4)	6.2	3.9	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄、内側ミガキ後黑色地獄	120-33	
235	122E6N12_15	黒A	黒AII	(12.0)	6.8	3.8	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄、内側ミガキ後黑色地獄	120-34	
236	122E6カマF	黒A	黒AII	(13.0)	6.0	3.7	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄、内側ミガキ後黑色地獄	120-35	
237	122E6N5	黒A	黒AII	(12.0)	(5.2)	(3.7)	ロヨコナメ	ロヨコナメ、糸輪地獄、内側ミガキ後黑色地獄	120-36	

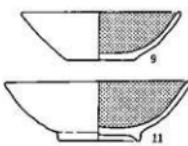
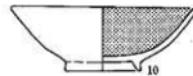
%	地名・位置	樹種	胸高	直径(cm)	樹齢	樹形	特徴	調査状況	伐採状況	伐採方法	伐採年	
238	1225NE2	黑A	8.8	6.9			黒苔一帯	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。	付高台後ナデ		122-23	
239	1225NE3	黑A	6.6	6.6			黒苔/1帯/3	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。	付高台後ナデ		122-24	
240	1225NE4	黑A	(13.0)				口1/4	ロクロナデ、内面ミガキ後黑色處理。			122-25	
241	1225NE5	黑A	(13.0)	6.7	4.4	□1/10	ロクロナデ、回転式切				122-26	
242	1225NE6	黑A	(12.4)	(6.4)	3.7	□1/8	△3/4	ロクロナデ、回転式切			122-27	
243	1225NE7	黑A	(13.4)	7.6	(3.6)	□1/8	△1/2	ロクロナデ、回転式切			122-28	
244	1225NE8	黑A	(5.1)	7.6	3.4	□1/8	△4/5	ロクロナデ、回転式切			122-29	
245	1225NE9	黑A	(2.3)	(6.8)	(3.7)	□3/6	△3/4	ロクロナデ、回転式切			122-30	
246	1225ENW1	黑A	(1.8)	6.8	(1.8)	□1/8	△1/2	ロクロナデ、回転式切			122-31	
247	1225ENW2	黑A	(2.5)	—		□1/4					122-32	
248	1225ENW3	黑A	11.15	6.45	1.45	□1/2	黒苔一帯	ロクロナデ、内面ミガキ後黑色處理。	付高台後ナデ		122-33	
249	1225ENW4	黑A	11.15	6.45	1.45	□1/2	黒苔一帯	ロクロナデ、内面ミガキ後黑色處理。	付高台後ナデ		122-34	
250	1225EN6	黑A	12.0	(5.3)	(5.7)	□1/4	△3/4	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。			122-35	
251	1225NE	黑A	6.7			黒苔/1	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。				122-36	
252	1225NE	黑A	(11.1)	(6.3)	(6.1)	□1/4	△1/2	ロクロナデ、回転式切			122-37	
253	1225NW1	黑A	(15.0)	(6.4)	(5.26)	□1/4	△1/2	ロクロナデ、回転式切			122-38	
254	1225NW2	黑A	(12.6)	(6.6)	(5.05)	□1/4	△1/2	ロクロナデ、回転式切			122-39	
255	1225NW3	黑A	13.15	6.0	3.8	□1/2	△2/3	ロクロナデ、回転式切			122-40	
256	1225NW4	黑A	(10.3)	11.6	2.35	□1/2	黒苔/1	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。	付高台後ナデ		122-41	
257	1225NW5	黑A	12.0	—		□1/4					122-42	
258	1225NW6	黑A	12.0	—		□1/4					122-43	
259	1226NE1	土	15.2	7.9	5.3	□1/2	黒苔/1	ロクロナデ、内面ミガキ後黑色處理。	付高台後ナデ		122-44	
260	1227NE3	土	11.2	5.6	3.45	□1/7	黒苔	ロクロナデ、回転式切			122-45	
261	1227NE5	土	12.15	5.2	3.3	□1/2	黒苔	ロクロナデ、回転式切			122-46	
262	1227NE6	土	—	6.3	—	黒苔	ロクロナデ、回転式切				122-47	
263	1227NE7	土	13.4	5.45	3.15	□1/1	黒苔	ロクロナデ、内面ミガキ後黑色處理。	付高台後ナデ		122-48	
264	1227NE8	土	—	7.5	—	黒苔一帯	ロクロナデ、回転式切				122-49	
265	1227NE9	土	13.6	—		□1/1	黒苔	ロクロナデ、外側ロクロナデ兼ハメ、内面カキモ、ナデ			122-50	
266	1229NE8	土	—	—		□1/1	黒苔	外側ロクロナデ兼ハメ、内面カキ			122-51	
267	1229NE9	土	(13.0)	6.3	(3.75)	□1/6	黒苔	ロクロナデ、回転式切			122-52	
268	1229NE10	土	13.85	6.8	4.15	□1/3	黒苔	ロクロナデ、回転式切			122-53	
269	1229NE11	土	—	(6.4)		□1/4		ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。			122-54	
270	1229NE12	土	—	(4.0)		□1/3		ロクロナデ、カズリ、内面ロクロナデ兼ミガキ、回転式切			122-55	
271	1229NE13	土	—	(12.4)		□1/2		ロクロナデ、付高台後ナデ			122-56	
272	1229NE14	土	—	(4.2)		□1/1	黒苔/1	ロクロナデ、ケズリ、付高台後ナデ			17C後半 濱戸美義 摩鹿底原 有 露に落 く朱漆痕	
273	1331NE	黑A	11.9	6.65	3.2	□1/3	黒苔	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。			133-1	
274	1347E-12541	樹種	—			黒苔/1	ロクロナデ、内面ミガキ後黑色處理。	付高台後ナデ			134-1	
275	1347NE1	土	杯A	(9.75)	(4.8)	1.85	□1/4	黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機			135-1
276	1347NE2	土	杯A	—		黒苔/1	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-2	
277	1347NE3	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-3	
278	1347NE4	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-4	
279	1347NE5	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-5	
280	1347NE6	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-6	
281	1347NE7	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-7	
282	1347NE8	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-8	
283	1347NE9	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-9	
284	1347NE10	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-10	
285	1347NE11	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-11	
286	1347NE12	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-12	
287	1347NE13	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-13	
288	1347NE14	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-14	
289	1347NE15	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-15	
290	1347NE16	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-16	
291	1347NE17	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-17	
292	1347NE18	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-18	
293	1347NE19	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-19	
294	1347NE20	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-20	
295	1347NE21	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-21	
296	1347NE22	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-22	
297	1347NE23	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-23	
298	1347NE24	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-24	
299	1347NE25	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-25	
300	1347NE26	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-26	
301	1347NE27	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-27	
302	1347NE28	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-28	
303	1347NE29	土	杯A	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ、搬運機				135-29	
304	G NS6E9	土	杯A	(11.0)	(6.3)	2.3	□1/3	△1/4	ロクロナデ、回転式切、付高台後ナデ			136-1
305	G NS6E10	白	樹種	(13.8)	5.8	(4.1)	□1/6	黒苔	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ、内面カキモ、ナデ			137-1
306	G NS6E11	白	樹種	—	7.0		黒苔	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。			137-2	
307	G NS6E12	白	樹種	(14.4)	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。			137-3	
308	G NS6E13	白	樹種	(13.0)	—		黒苔	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。			137-4	
309	G NW9	樹種	杯A	(13.5)	(6.0)	(4.05)	□1/6	△1/3	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。			138-1
310	G NW9S	樹種	杯D	(13.5)	(5.9)	(2.4)	□1/3	△1/3	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。			138-2
311	G NW9S	樹種	杯A	9.95	4.3	2.95	□1/3	△1/3	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。			138-3
312	G NS9E1	樹種	杯A	13.1	5.7	4.45	□1/2	△1/2	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。			139-1
313	G NS9E2	樹種	杯A	(13.8)	5.8	(4.1)	□1/6	黒苔	ロクロナデ、回転式切、内面ミガキ後黑色處理。			139-2
314	G NS9E3	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-3
315	G NS9E4	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-4
316	G NS9E5	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-5
317	G NS9E6	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-6
318	G NS9E7	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-7
319	G NS9E8	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-8
320	G NS9E9	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-9
321	G NS9E10	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-10
322	G NS9E11	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-11
323	G NS9E12	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-12
324	G NS9E13	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-13
325	G NS9E14	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-14
326	G NS9E15	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-15
327	G NS9E16	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-16
328	G NS9E17	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-17
329	G NS9E18	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-18
330	G NS9E19	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-19
331	G NS9E20	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-20
332	G NS9E21	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-21
333	G NS9E22	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-22
334	G NS9E23	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-23
335	G NS9E24	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-24
336	G NS9E25	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-25
337	G NS9E26	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-26
338	G NS9E27	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-27
339	G NS9E28	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-28
340	G NS9E29	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-29
341	G NS9E30	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-30
342	G NS9E31	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-31
343	G NS9E32	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			139-32
344	G NS9E33	樹種	杯A	(13.7)	5.7	(3.25)	□1/20	黒苔	ロクロナデ、ヘラツリ、付高台後ナデ、搬運機			

No	所在地・記号	種別	基準	面積(㎡)			持分率	面積	地質	地主	実測No
				口積	積込	高さ					
315	G N3Kw6	渠	新B	(3.0)			面積1/3 高さ1/6	ロクロナダ、回転ヘラクゼリ、付高台後ナダ			G-18
316	G N3Kw6	渠	新B	(10.6)			面積1/4	ロクロナダ、回転ヘラクゼリ			G-19
317	G N3K3	渠	新Aか				外周クロナダ、タキシム、内側ロクロナダ、断て真底			G-20	
318	G N3W6	渠	新A	(5.2)			面積1/2	ロクロナダ、回転糸切	内外堆積物 内面削付層	G-21	
319	G N6Kw6	渠	台付渠				内側ミキモ、開削内面ナダ			G-22	
320	G N6E3	土	新AII	(6.4)	(3.1)	(1.75)	口/8 面1部	ロクロナダ、回転糸切		II地G-1	
321	G N3W6	土	新AかB	(5.3)			面積1/4	ロクロナダ、回転糸切、付高台後ナダ		II地G-2	
322	G S6E9	土	新AII	9.45	4.3	1.7	口/3 面1 底一側	ロクロナダ、回転糸切	内面黄化物付層 内壁塗装み有	II地G-3	
323	G N6E3	渠	新A	(12.35)	6.7	(3.6)	口/8 底前	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層		II地G-4	
324	G N6E3	渠	新A	(6.6)			底1/4	ロクロナダ、回転糸切		II地G-5	
325	G N3Kw6	渠	新A	(13.1)	(5.4)	(3.35)	口/4 底1部	ロクロナダ、回転糸切		II地G-6	
326	G N2E6	渠	底か				面積1/8	ロクロナダ、回転ヘラクゼリ、付高台後ナダ、 付高台後付層	底面14号筋	II地G-7	
327	G N8W6	渠	底B	(13.6)	(7.2)	(2.8)	口/15 底前一部 高さ1/6	ロクロナダ、回転ヘラクゼリ、付高台後ナダ 付高台後付層	重ね剥き底石	II地G-8	
328	G N6W6	渠	底B	(16.0)			口/10	ロクロナダ		II地G-9	
329	G N6W6	中段	底B 1 B 1 十脚船	(6.3)	(7.2)	(1.45)	口/8 底1/3	チップくね、底部ナダ	かわらけ	II地G-10	
330	G NS5E20	海面	透か紙	(23.0)			口/16 口一側	口横壁ナダ、内外周ロクロナダ	常滑港	II地G-11	
331	G NS5E20	海	小橋				口/13	ロクロナダ	NNS3-1		
332	トレンチ	土	新A	(16.2)			面積1/6	内側ミキモ		T-2	
333	トレンチ	土	新A	(10.6)			口/7.5	ロクロナダ、内側ミキモ、内面ナダ		T-3	
334	トレンチ	土	小型覆D	(13.7)			口/7.5	ロクロナダ、内側ミキモ、内面ミキモ底色絶層		T-4	
335	トレンチ	土	新AII	(12.8)	(6.8)	3.35	口/14 底2/3	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層		T-5	
336	トレンチ	土	新AII	(6.8)			底1/2	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層		T-6	
337	トレンチ	土	新A	(3.4)			底1/4	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層		T-7	
338	トレンチ	土	新A	(7.2)			底1/3	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層、 付高台後付層			
339	トレンチ	土	新A	(6.8)			底3/4	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層、 付高台後付層		T-8	
340	トレンチ	新竹	新竹	(5.8)			底1/4	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層、 付高台後付層		T-9	
341	トレンチ	新A	新A	(34.0)			口/16	ロクロナダ、内面ミキモ底色絶層		T-10	
342	トレンチ	渠	新A	5.5			底1/5	ロクロナダ、回転糸切		T-11	
343	トレンチ	渠	新A	(16.4)			口/5	ロクロナダ		T-12	
344	トレンチ	渠	新A	(15.9)			口/12	ロクロナダ		T-13	
345	トレンチ	渠	新AII 10 III	(15.6)			口/12	ロクロナダ、大型通水道ヘラクゼリ		T-14	
346	トレンチ	渠	新A	(8.4)			底1/3	ロクロナダ、回転糸切、付高台後ナダ	近海自然神社看 内面底石有	T-15	
347	トレンチ	無	無	(2.4)			口/2/5	回転ヘラクゼリ、内面ロクロナダ、静系糸切、 付高台後ナダ	外側堆積物の板か 外側及び内面底石 自然神社看	T-16	
348	トレンチ	渠	小橋	(10.0)			口/6	ロクロナダ、無		T-17	
349	トレンチ	渠	底B	(13.5)	(6.3)	2.35	口/2 高さ1/2	ロクロナダ、付高台後ナダ、運び渡れ物跡か 付高台後ナダ		T-18	
350	トレンチ	渠	底	(12.9)	(7.4)	2.4	口/12 高さ1/2 高さ1/6	ロクロナダ、付高台後ナダ、付高台後ナダ、 付高台後付層		T-19	
351	トレンチ	渠	新A	(14.0)	(3.0)	(3.7)	口/6 底1/6	ロクロナダ、回転糸切		T-20	
352	トレンチ	渠	新A	(5.2)			底1/4	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層		T-21	
353	トレンチ	渠	新A	(13.0)			口/6	ロクロナダ		T-22	
354	トレンチ	渠	新A	(3.0)	(5.8)	(3.6)	口/12 底1/5	ロクロナダ、回転糸切		T-23	
355	トレンチ	渠	新A	(10.8)			口/12	ロクロナダ		T-24	
356	渠	渠	新AII	(9.0)	(5.4)	1.6	口/5 底1/5	ロクロナダ、回転糸切		T-25	
357	渠	渠	新A II	(14.0)	(6.1)	5.2	口/5 底1/5	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層		T-26	
358	渠	渠	新A	(5.5)			底1/5	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層、 付高台後ナダ		T-27	
359	渠	渠	新A	(11.4)			底1/5	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層	内面底石有	T-28	
360	渠	渠	新A II	(13.1)	(5.7)	(5.3)	口/14 底1/3	ロクロナダ、付高台後ナダ、内面ミキモ底色絶層		T-29	
361	渠	渠	底B	(4.3)	(3.1)	2.8	口/12 底2/3	外側ミキモ底色絶層、内面ミキモ底色絶層、底部ナダ	底部ナダ有	T-30	
362	渠	渠	新竹				口/2	回転ヘラクゼリ、内面ミキモ底色絶層、 内面ミキモ底色絶層ナダ	底面直見部 疊合底有か 底面差有	T-31	
363	渠	渠	新A	(12.8)	(7.6)	4.6	口/10 底1/4	ロクロナダ、回転糸切		T-32	
364	渠	渠	新A	(12.0)	(5.9)	3.3	口/12 底1/4	ロクロナダ、回転糸切		T-33	
365	渠	渠	新A	(12.4)	(5.4)	3.65	口/8 底1/3	ロクロナダ、回転糸切		T-34	
366	渠	渠	新B				底1/3	ロクロナダ、回転ヘラクゼリ、付高台後ナダ	底面へらばらか 底板14号筋	T-35	
367	渠	渠	渠				底1/5	ロクロナダ、回転ヘラクゼリ、付高台後ナダ、 底面差有		T-36	
368	渠	渠	渠				底1/4	ロクロナダ、回転糸切、付高台後ナダ、施設	円山見込部 疊合底有か 底面差有	T-37	
369	渠	渠	黑A				底面差有	ロクロナダ、回転糸切、内面ミキモ底色絶層、 付高台後ナダ	底面差有	T-38	
370	渠	渠	小型覆C	(10.2)			口/8	ロクロナダ、回転糸切		T-39	
371	渠	渠	新A	(13.4)	(6.4)	3.9	口/8 底1/5	ロクロナダ、回転糸切		T-40	
372	渠	渠	新A				底1/4	ロクロナダ、回転糸切		T-41	
373	渠	渠	新B VかVI				底1/4	ロクロナダ、回転糸切、付高台後ナダ		T-42	
374	渠	渠	渠				底1/5	ロクロナダ、回転ヘラクゼリ、付高台後ナダ、 底面差有		T-43	
375	渠	渠	底か				底1/8	ロクロナダ、回転ヘラクゼリ、回転糸切、付高台後ナダ	東南洋無鉛海底	T-44	
376	渠	渠	新B				口/1/3	ロクロナダ、内面ハテミス、内面ミキモ、ナダ		T-45	
377	砂土	砂土	小山側				底1/8	ロクロナダ、回転糸切、付高台後ナダ	ハイヒ-1		

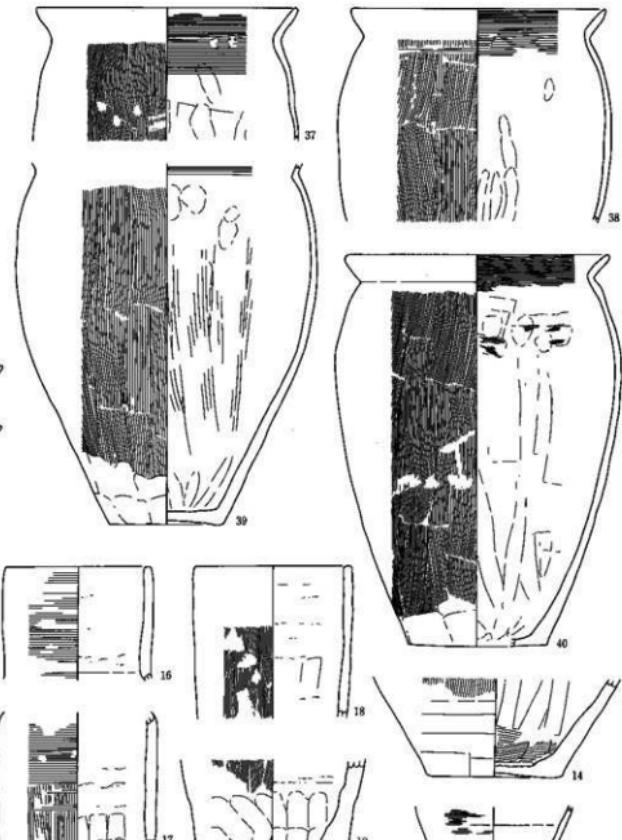
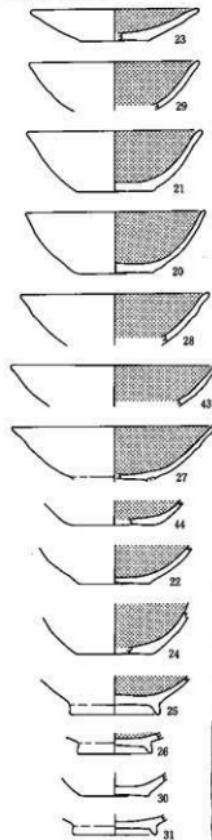
98住(1~8)



100住(9~11)

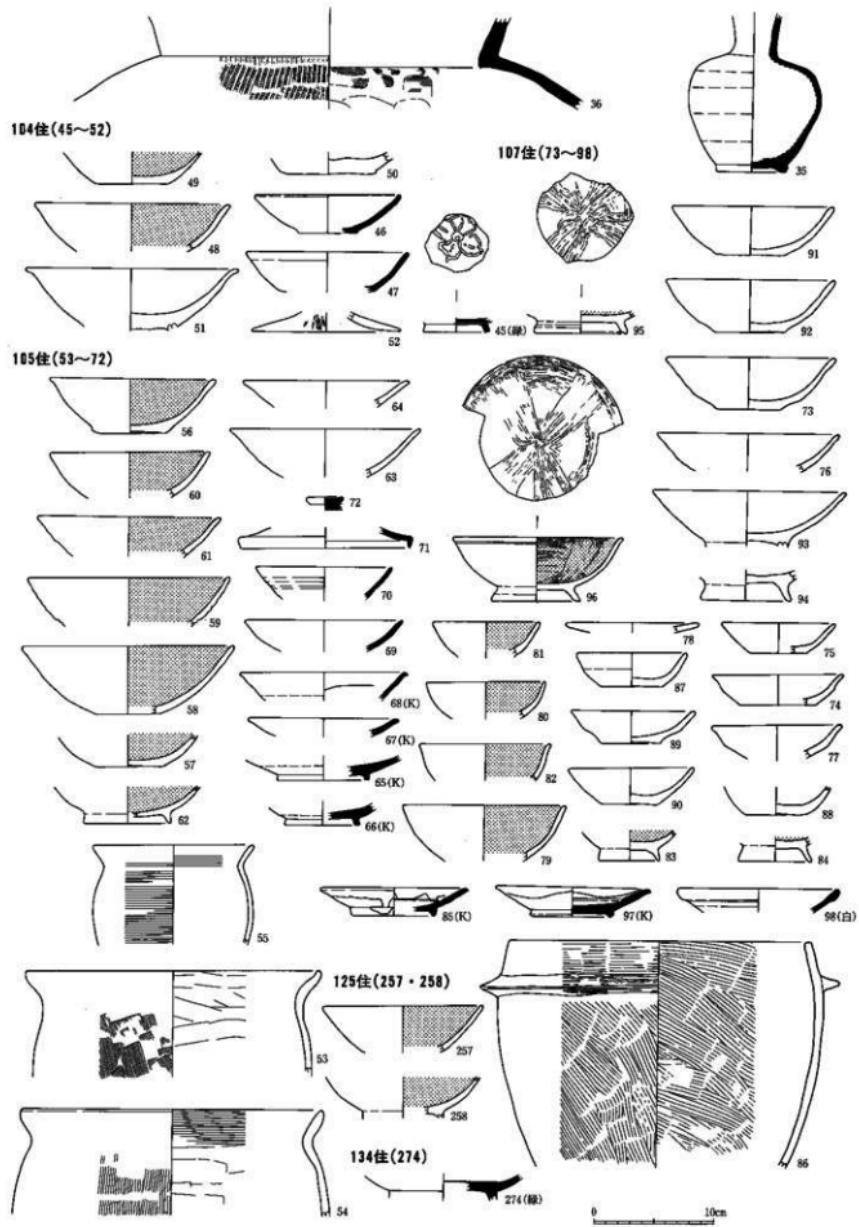


102住(14~44)

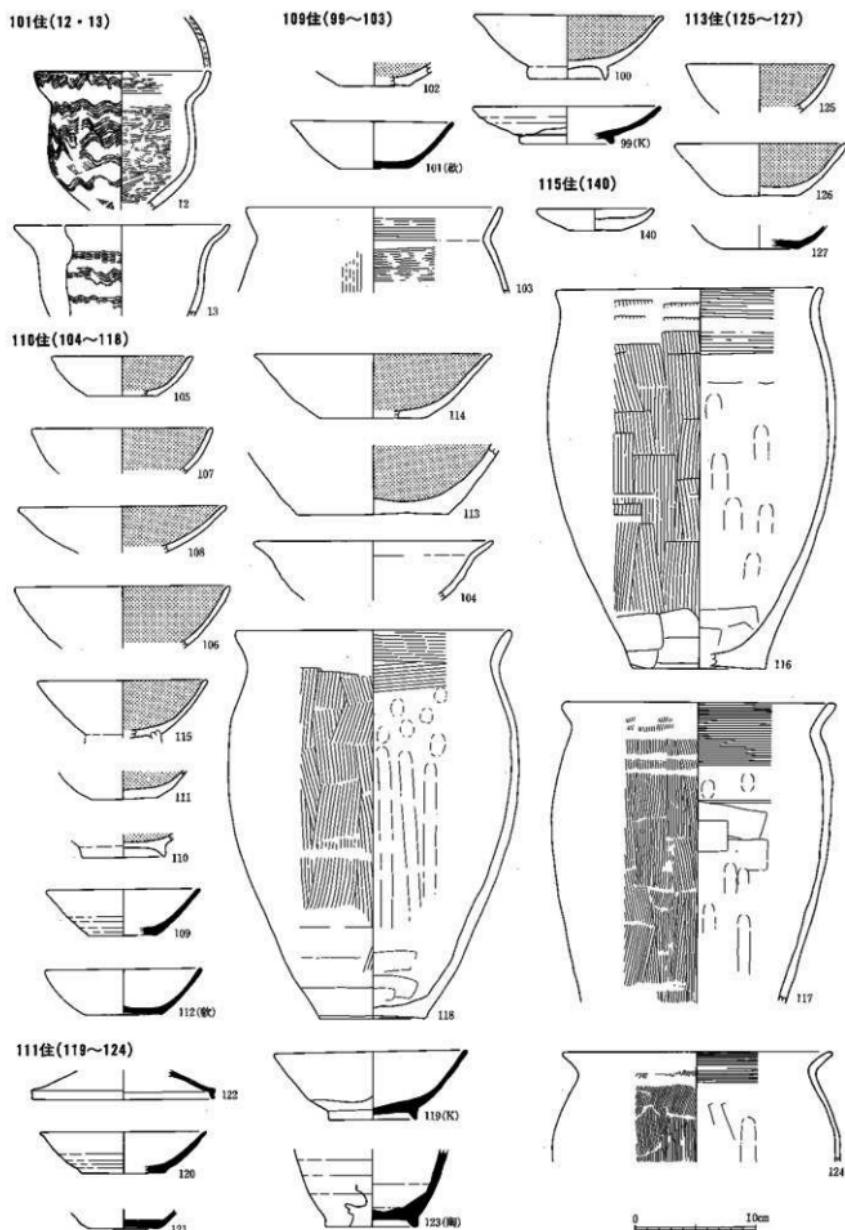


0 10cm

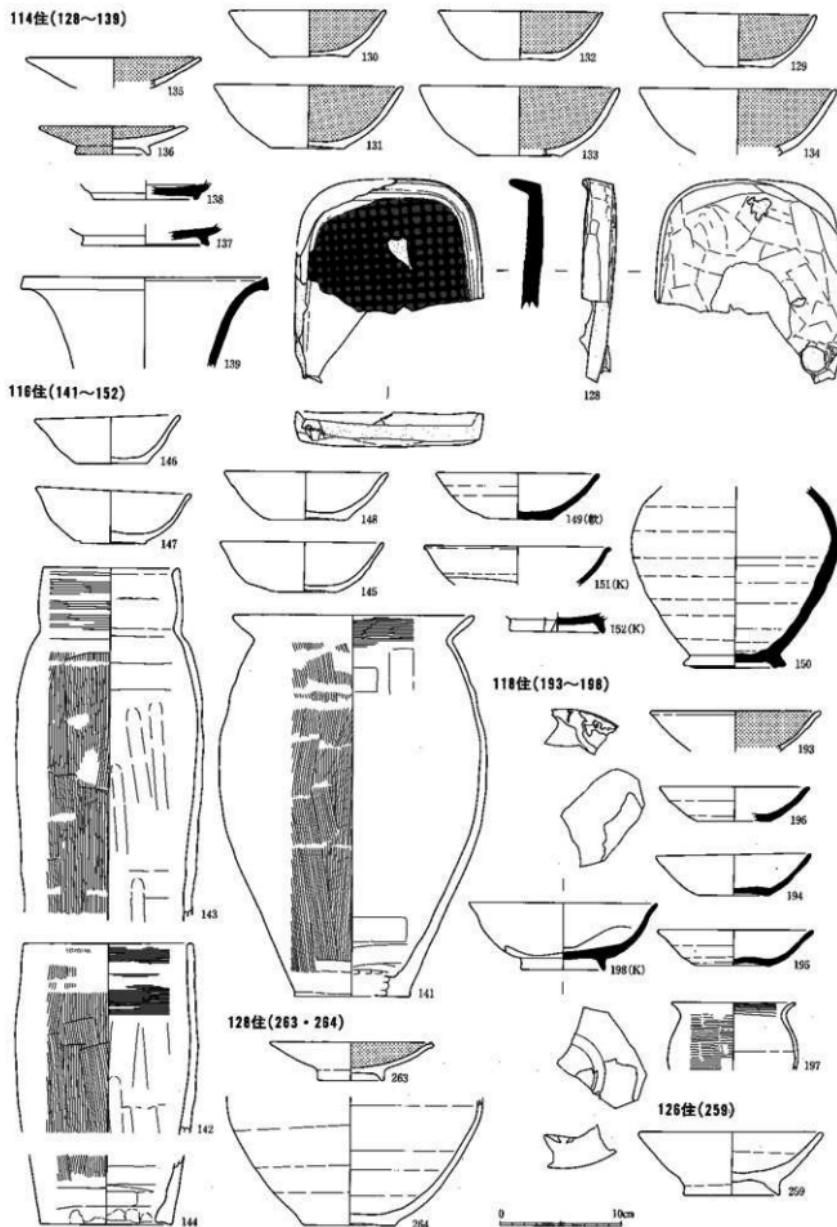
第14図 土器・陶磁器(1)



第15図 土器・陶磁器(2)

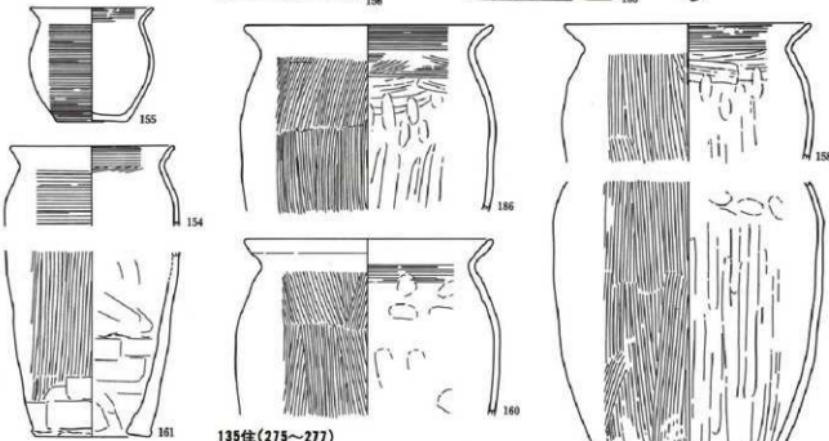
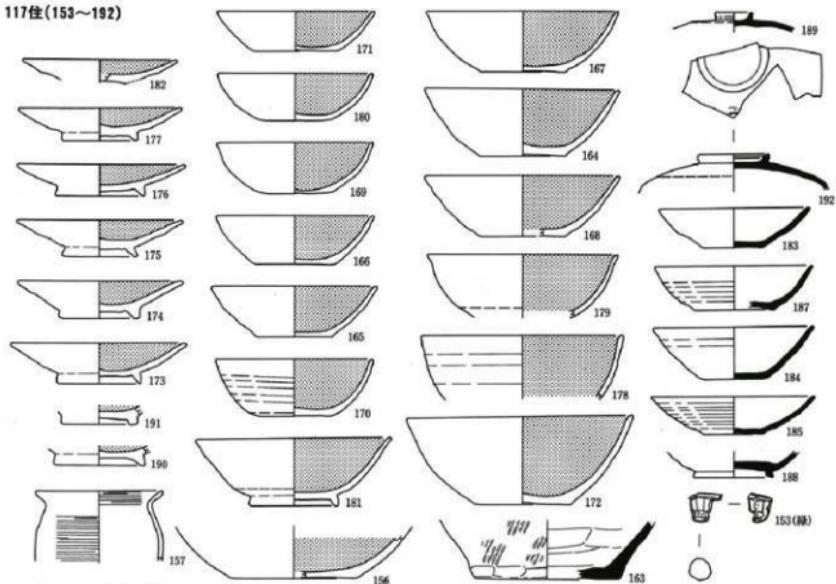


第16図 土器・陶磁器(3)



第17図 土器・陶磁器(4)

117住(153~192)



127住(260~262)



135住(275~277)

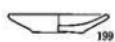


136住(278)

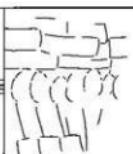
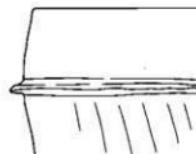
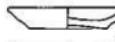
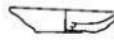


第18図 土器・胸磁器(5)

119住(199~201)



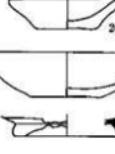
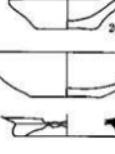
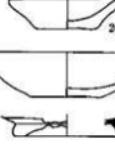
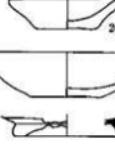
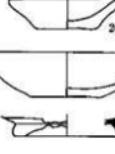
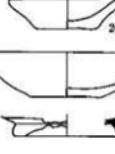
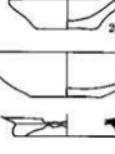
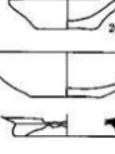
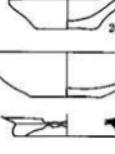
121住(202~215)



199

200

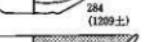
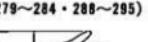
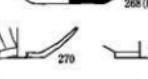
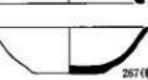
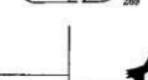
201



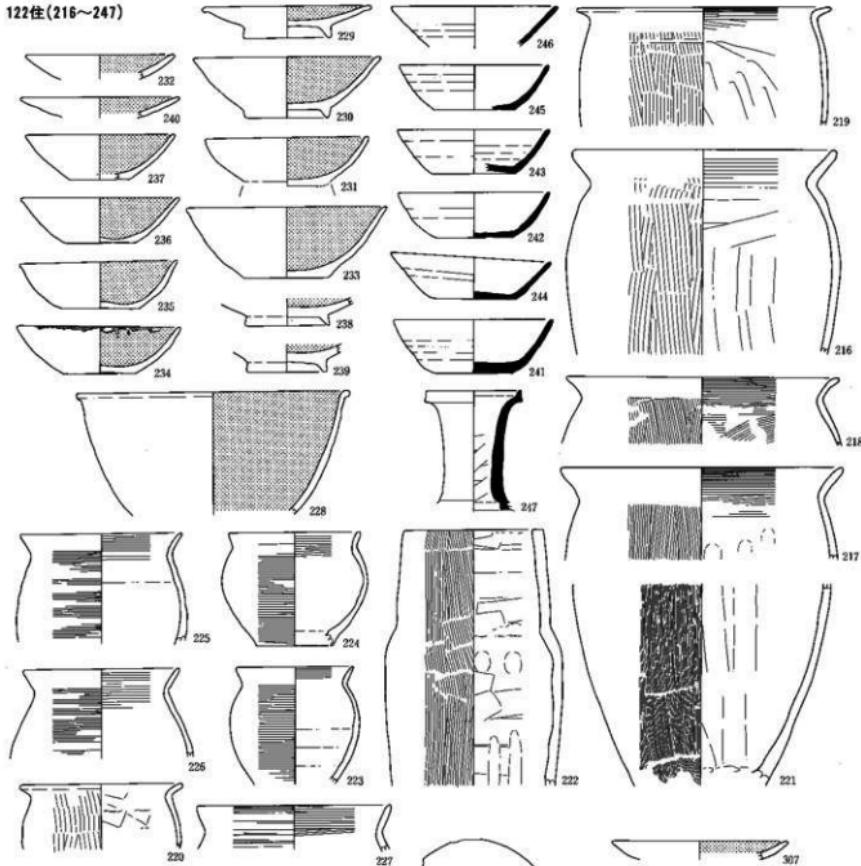
133住(273)



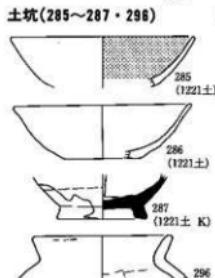
129住(265~272)



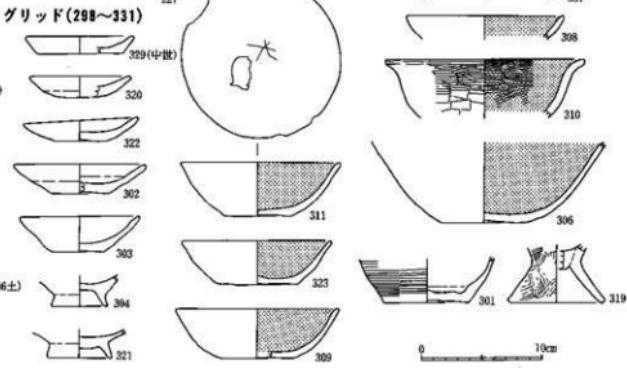
122住(216~247)



土坑(285~287・296)



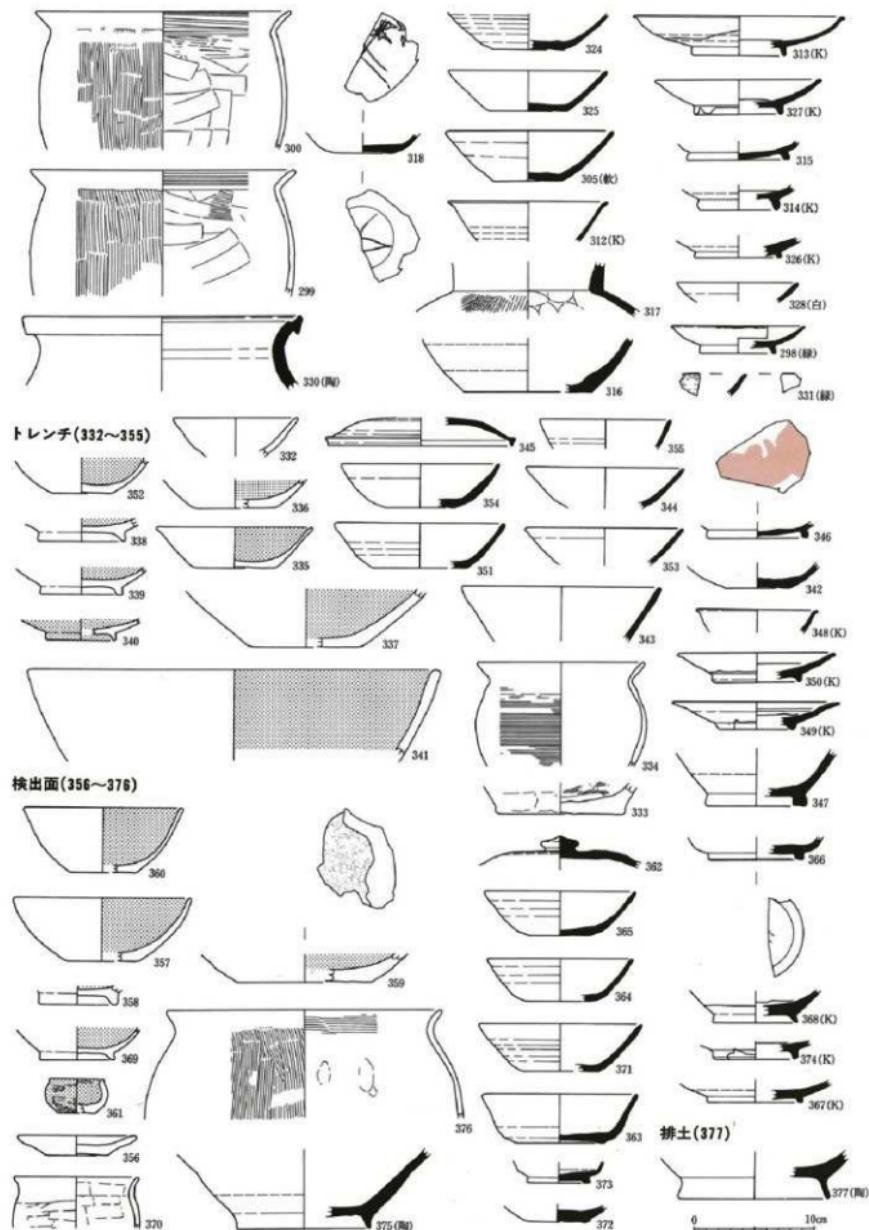
グリッド(298~331)



溝(287)



第20図 土器・陶磁器(7)



第21図 土器・陶磁器(8)

石器群の概要

県町遺跡第12次調査では、出土した土器の型式と考えられるものから、弥生時代、古代、中世に帰属すると推定される遺構が検出されているようである。遺構検出面、石器認定基準、及び石器回収基準は不明であるものの、恐らくは所謂定形的な石器を中心として、62点の石器群が回収された^(註1)。

三次元座標記録率12.9%の本石器群に対し、接合作業及び母岩識別作業を2人日実施したものの、複数個体で構成される母岩別資料は確認し得なかった^(註2)。

【補注】

註1 遺構検出面が複数設定されたようであるが、関西区壁面及び遺構切り合い部の断面図取得率が低いようであることから不明な点が多い。また、粗質石材削離系石器群及び、灰や塵等の構成材を主体とすると考えられる粗質石材素材分割削離系石器群は回収しないという調査方針で本石器群は回収されたようであるが、器種組成では自然灑及び断面類の組成率は高く、石器認定回収基準についても不明であるといわざるを得ない。

註2 遺物主要諸元は遺物群、ここでは石器群が対象となるが、その回収精度、整理作業精度、及びその質量を、可能な限り簡便に表示しようとしたものである。石器を対象として考察したものであるが、その他の遺物においても適用は可能であろう。遺構主要諸元は遺構の質と並び、調査精度の数値化を試みたものである。なお、本調査における遺構主要諸元は、諸元の割合から算出しなかった。稀少遺物及び希少遺物の有無で決まりがちな遺跡の評価であるが、遺構主要諸元及び遺物主要諸元の審査から、調査精度及び遺跡の構成要素である遺構遺物の質とによる、より客観的な遺跡の評価が可能になるものと考えられる。

【主要参考文献】

- 内藤 団 2002「土器・金属器」「堀の内遺跡Ⅱ」松本市教育委員会 pp9~pp13
 太田圭郎 2000「石器」「平澤遺跡Ⅱ」松本市教育委員会 pp63~pp122.
 2000「石器」「百鬼遺跡Ⅳ」松本市教育委員会 pp44~pp49,57,58
 2001「石器」「岡の宮遺跡Ⅰ」松本市教育委員会 pp9~pp14,pp25~29
 2002「石器」「堀の内遺跡Ⅲ」松本市教育委員会 pp8

調査区壁面:a	断面図取得箇区壁面:b	%
調査面積:c	測点分布密度:d	点/平米
遺構面:e	測点分布	点/平米
新面図取得遺構数:f	fe	%
新面写真撮影遺構数:g	ge	%
遺構切り合い部数:h	hf	%
新面写真撮影切り合い部数:j	jh	%
遺構面回収率:k		%

第6表 遺構主要諸元一覧

遺構主要諸元	
調査区壁面長:調査面積:	調査面積面積:調査面積面積
断面図取得箇区壁面長:断面図取得箇区壁面長	断面図取得箇区壁面長:断面図取得箇区壁面長
遺構面:遺構面	遺構面:遺構面
新面図取得遺構数:新面写真撮影遺構数	新面図取得遺構数:新面写真撮影遺構数
遺構切り合い部数:新面写真撮影切り合い部数	遺構切り合い部数:新面写真撮影切り合い部数
遺構面回収率:新面写真撮影切り合い部数	遺構面回収率:新面写真撮影切り合い部数

絶対取扱い部数	単純率	100.0%
接合個体数	接合率	0.0%
同一母岩個体数	同一母岩率	0.0%
母岩別割合或個体数	母岩別割合率	0.0%
母岩別割合(接合部初数)	平均接合部個体数	0.0
三次元座標記録個体数	三次元座標記録率	12.9%
遺構面回収率	遺構面回収率	74.2%

第7表 遺物主要諸元一覧

遺構略号・遺構名

ID	出土遺構I	出土遺構II	重量(g)	石材略号	残存率%	母岩	総合
09	SB104	Hブロック	29.5	QuAn	Ws	単塊	-
	10	SB104	1	Ob	BC	単塊	-
	11	SB104	1	Ph	PP	-	-
	15	SB113	NE	72.8	QuAn	Ws	単塊
	26	SB121	Ob	1.7	Ob	RF	単塊
	28	SB123	Ob	5.8	Ob	C	単塊
	32	SK1203	NB	3.6	CrSc	PP	単塊
	34	SK1203	-	2.4	Ob	RF	単塊
	49	TK	W堆区	244.0	An	P3	-
	62	SB129	No.1	20.9	Cr	Bt	単塊

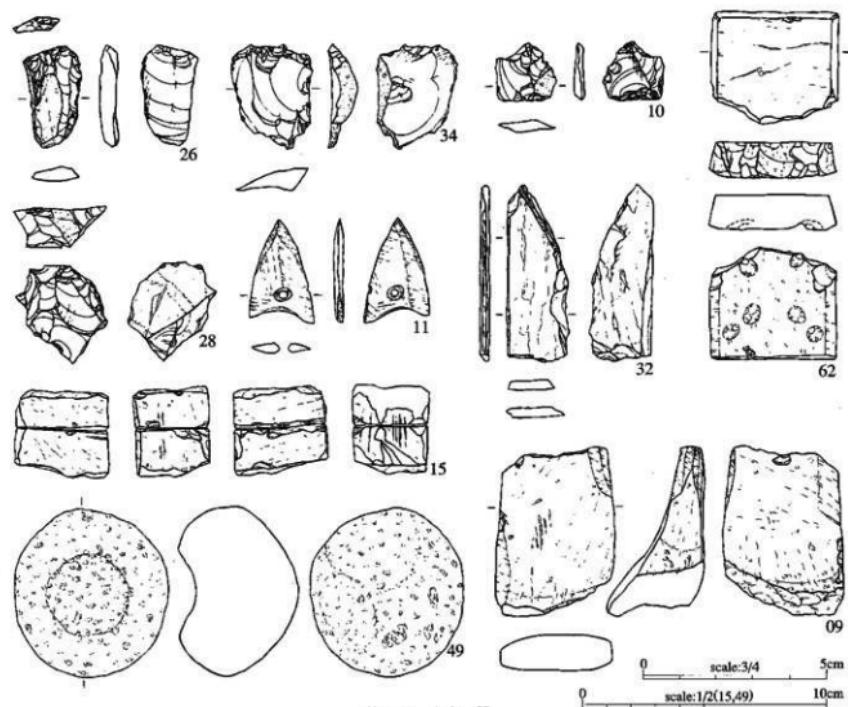
第8表 遺構略号一覧 第9表 対面図掲載個体属性一覧

器種略号	器種名
M5	原石
C	石核
F	剥片
BC	楔状石核
RF	二次加工ある剥片
MF	微細刃状ある剥片
PF	微細鋸形石器
P	鉋
PT	縦片
PT1	縦片1類
PTC	縦片複合
P2	縦石核2類
P3	縦石核3類
Ws	砥石芯/心器
Bt	審止形石器

第10表 器種略号一覧

石材略号	石材名
Ob	黒耀石
QuAn	石英安山岩
An	安山岩
CrAs	富貴斑灰岩
Di	閃綠岩
GrAp	半花崗岩
Po	碧玉岩
Sa	碧玉
MeTu	4
MeTu	霞貴斑灰岩
Tu	霞灰岩
MeSl	1
Ph	3
CrSc	1
Qu	2
Cr	2
水晶	1

第11表 石材略号一覧 第12表 石材単位器種組成



第22図 出土石器

遺構	Ob	Qu/An	An	CrAs	Di	GzAp	Po	Sa	MeTu	Tu	MeSt	Ph	CrSc	Qu	Cr	計	
SB099														1	SB099		
SB102					1									1	SB102		
SB104	1	1					2							1	SB104		
SB105														2	SB105	1	
SB107														1	SB107		
SB110														1	SB110		
SB113														2	SB113		
SB114														1	SB114		
SB117														4	SB117	1	
SB118														1	SB118		
SB119														1	SB119		
SB120														1	SB120		
SB121	1													1	SB121		
SB122								1						1	SB122		
SB123	3													3	SB123		
SB126														1	SB126		
SB129														1	SB129		
SK1203	1							1						1	SK1203		
SK1204		1												1	SK1204		
SK1223														1	SK1223		
SK1229														1	SK1229		
SK1230														1	SK1230		
SK1234									1					1	SK1234		
SK1243										1				1	SK1243		
SP90														1	SP90		
SP57														1	SP57		
SQ1														1	SQ1		
TG	2								1	2				1	TG		
TK		2						1	1	3	1			3	TK		
TT														1	TT		
TY														1	TY		
計	8	2	9	2	2		1	5	4	18	3	1	1	1	4	62	91

第13表 遺構単位石材組成

遺構	MS	C	F	BC	RF	MF	PP	P	PT	FTI	PTC	P2	P3	Ws	Ph	計
SB099	1	SB099						1	1					1	2	2
SB102	8	SB102						1	5					1	8	2
SB104	8	SB104													1	1
SB105	1	SB105													2	2
SB107	1	SB107														1
SB110	1	SB110														1
SB113	2	SB113														2
SB114	1	SB114														1
SB117	4	SB117					1		2						4	
SB118	2	SB118							1						2	
SB119	1	SB119													1	1
SB120	1	SB120													1	1
SB121	2	SB121													2	
SB122	1	SB122													1	1
SB123	3	SB123													3	
SB126	1	SB126													1	1
SB129	1	SB129													1	1
SK1203	3	SK1203													3	
SK1204	1	SK1204													1	1
SK1223	1	SK1223													1	1
SK1229	1	SK1229					1									1
SK1230	1	SK1230														1
SK1234	1	SK1234														1
SK1243	1	SK1243														1
SP90	1	SP90														1
SP57	1	SP57					1									1
SQ1	1	SQ1														1
TG	2	TG						1	1							2
TK	2	TK								3	1	1	1	1	8	
TT		TT														2
TY		TY														1
計	8	2	9	2	2	1	5	4	16	3	1	2	15	12	7	62

第14表 遺構単位器種組成

金属器の概要

県町12次調査では4面あるとされた検出面が不明であるものの、弥生時代から中世に帰属すると考えられる遺構・遺物が検出され、61点の金属器が回収されている。しかし、グリッド回収遺物は帰属層準不明、三次元座標記録による回収も若しく低い状況にあり、遺構帰属個体についても三次元座標記録のある金属器は5点に止まる。

金属器はさびに覆われ单独で出土し、古墳など特殊な遺構内の出土金属品を除いて接合関係は望めない。その接合関係も金属種によっては接合関係を認定し得る可能性はあるが、金属器の腐蝕過程の結果、崩壊した可能性が高い。よって金属器のみでは、遺構間接合・同一個体資料という共時態内における通時の関係の把握はほぼ不可能である^(註1)。そのため他の遺物によって実施された遺構間土層対比を援用し、金属器における遺構間の通時の・共時の関係を把握するにとどまる。すべての遺物は調査における層準把握と遺物取り上げ方法などの調査精度の直接的影響を受けるが、金属器の場合は援用すべき遺物の整理作業方法によって良くも悪くも更に大きな影響を受ける^(註2)。

本調査地点においては、金属器の回収精度が著しく低く金属器自体が遺構とは遊離し、援用すべき他の遺物でも調査精度・回収精度が著しく低いために、遺構間接合・同一個体資料という共時態内における通時の関係の把握は不可能であるため遺構間土層対比情報もなく、他の遺物とも金属器は遊離している。よって本遺跡においては、層準・検出面等の問題は残されたままで三次元座標記録によって回収された遺物についても通時の・共時の関係は不明であり、位置情報のみ判明したものを図示するにとどめざるを得ない。

【補注】

- 註1 金属器の中で鉛は鉛鏡から遺構の年代を決定される向きもあるが、三次元座標記録と出土層準把握が成されていなければ遺構とは遊離し、層準把握とはなり得ない。本調査で三次元座標記録のある鉛の点数は0点である。所謂光形品とされる遺物についても同様である。上器の所謂光形品とされる遺物は、ある試み段階の典型的として遺構記録では重複がされているが、遺構内における通時の・共時の関係の把握は検証できない状況である。三次元座標記録と出土層準把握が成された割れているモノにこそ情報が内包されており、遺構間接合資料から通時の・共時の関係を把握することが重要である。
- 註2 標用検査では通常土器が扱われるが、現状において土器の操作作業は単なる復元作業の一環として扱なれていますのがほとんどで、資料の提示方法も土器盤式が先行した作付式・括弧提示のみで接合情報をも出土層準も不明なものが大多数を占め、金属器の通時の・共時の関係の把握は不可能である。近年、土器による調査資料提示・分析方法も試みられているが、伝統である土器盤式を遺構内における検証作業も成されていないにもかかわらず安価接用したものがかりで、遺構間接合資料から通時の・共時の関係を把握し遺構間土層対比を実施しているものではなく、現段階では援用検査に用いるには躊躇せざるを得ない。その点発掘調査精度の高い遺跡における石器の基本的な考古学分析から得られた情報からの援用検査は有効であると考えられる。

【参考文献】

阿部芳郎 1998 「遺物のライフサイクルと施設ブロックの形成過程」『土と櫻田遺跡第3次調査』岐阜市教育委員会pp.127~141

内堀 国 2002 「土器・金属器」『櫻の内遺跡Ⅲ』松本市教育委員会pp.9~13

太田小郎 2000 「心臓」「平瀬遺跡Ⅱ」松本市教育委員会pp.93~122

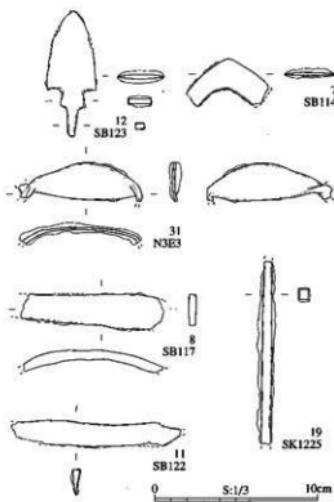
2001 「石器」「岡の宮遺跡Ⅰ」松本市教育委員会 pp.9~pp.25~29

遺構収集件数	61	単個率	100%
三次元座標記録個体数	6	三次元座標記録率	10.3%
遺構帰属個体数	37	遺構帰属率	60.7%

第15表 主要諸元一覧

出土遺構	金属種	釦	丸軒	筋轍車	刀子	縫	鏡	鉢	ワイヤー	本明	計
SB104	Fe	1			1			1		1	3
SB110	Fe									1	1
SB112	Fe									1	1
SB114	Fe									1	1
SB117	Fe		1						2	3	
SB122	Fe			1						1	1
SB123	Fe				1					1	1
SB130	Cu					1				1	1
SB135	Fe									1	1
SK1223	Fe	3							6	9	
SK1225	Fe								1	1	
SK1226	Fe	5							2	7	
SK1228	Fe					3				1	1
SK1234	Cu					1				1	1
SK1242	Cu					1				1	1
TG	Fe	2		1	1			1		7	12
TG	Cu						4				4
TK	Fe	3	1							3	7
TT	Fe		1							1	2
計		14	2	2	3	1	10	2	1	26	61

第16表 遺構金属種別単位所持器種



第23図 金属器実測図

第4章 調査のまとめ

県町遺跡の調査は今回で12回目を数える。以前からこの付近で平安時代の遺物が出土することは知られており、また昭和54年度以降行われている調査では、前回までに平安時代の遺構は住居址が42軒検出されている。加えてこの遺跡では縄文陶器の出土が多く、他の概期の遺跡と比べて大きく異なる点であることも知られている。今回の調査では縄文陶器自体の出土量は多いとはいえない。しかし、第3章で述べたように、縄文文陶や三足盤といった、生活用品とは異なる特殊な遺物が出土する、という特色がみられる。

この県町遺跡の性格を考えていくについて、まず調査を行った順に従って述べていくことにする。

今回の調査区は、表土を除去したところ、流路と思しき砂礫の範囲と、硬く縮まった黄褐色砂質土の範囲と大きく二つに分かれた。この黄褐色土の広がる範囲には、土坑、溝といった遺構が少ないながらも存在している。これらの遺構の覆土は主として灰褐色砂質土であり、また遺物は少ないながらも、常滑産の甕とみられるものが検出面より確認されていることから、ここには区画溝を有する中世の遺構が存在していたと考えられるため、この面を第1面として調査を実施した。ただし、これらの存在する面は、近代以降、松本県ヶ丘高校（旧制第二中学）の建設以前に削平され、遺構面としての残存度は良好ではない。宅地などとして利用されていたようで、近代とみられる建物基礎とみられるものもいくつか確認している。

黄褐色砂質土中には、何箇所かで大形の甕を多く出土する場所が存在していた。調査開始時点においては判らなかったが、検出及びグリッド調査の結果、それらがカマドを有する平安時代前期9世紀代の堅穴住居址であり、甕はその覆土中このものであることが明らかになってきた。また、ほぼ同じ面から平安時代後期11~12世紀の住居址も確認された。そこで、それらの存在する範囲を第2面として取り扱い、調査を実施した。また、甕の広がる範囲の中に、方形の掘り込みを確認したため、調査したところ、内部ピット中から、弥生時代中期の土器が数点出土した。わずかながら、薄川の影響を受けずに残った弥生時代の遺構が存在することが判った。

調査区内には、旧体育館の基礎が何本か入り、それをを利用して土層観察面（トレーンチ扱い）とした。そのうちの中央トレーンチの土層を基本土層とした（第24図）。東トレーンチ下部、調査区北東部において、黄褐色砂質土面からピットなどの遺構が確認された。これらは、第2面とした面から50~70cm下にあたり、しかも両者の間には礫層があることから、当初はこれが弥生時代の遺構面ではないかと考えた。しかし、調査の結果これらも平安時代前期9世紀代の遺構面であることが判った。結果的にこの面を第4面として扱うことになる。

第2面の下、黄褐色砂質土の面向けて掘り下げていく過程で、礫層中にいくつか土坑の掘り込まれた面が存在することが確認された。この面を第3面として調査を実施したところ、遺物は少ないながら北宋の渡来鏡が出土した。

第3面の砂礫を除去したところ、黄褐色砂質土の比較的安定した面が比較的広い範囲で残存しているのが確認された。そこからは住居址こそ検出されないが、土坑・ピットがいくつか検出されたため、この面を第4面とした。一部のピットは建物址を構成するもので、そのうちのP₁と、他のピット（P64）は、底部に礫石ともいべき礫壁を有するものであった。この面は比較的安定しているものの、南側と北側には薄川の大規模な流路址があることから、洪水から「生き残った」面であるといえる。事実この面には、南側の流路4からのオーバーフローと思しき浅い流路が何本か流れているようである。

次に、以上の調査結果を踏まえて、時代ごとに触れていく、簡単に考察してみることにする。

まず弥生時代であるが、この周辺での、第1、2、3、5次調査で住居址などの遺構は確認されている。主として集落の中心は、住居址が多く確認されている2、3次調査の行われたあがたの森公園東部にあるように思われる。5次調査の際に、弥生時代の遺構の存在範囲を、県ヶ丘高校南西隅辺りと捉えているようであるが、今回の調査では、さらに東側からの遺構を検出し、また遺物として、土器の他磨製石器なども出土し、これらはあまり磨耗していないことから、住居址は別として、遺構の広がりはもう少し東へ広がることが判った。ただこの辺りでは、第2章第1節で述べたように、薄川の影響を非常に強く受け、大部分は削られてしまい、一部分削られずに残った部分が存在したと考えるのが妥当であろうか。

古墳時代から奈良時代については、今回の調査では遺構・遺物ともほとんどみられない。しかし県ヶ丘高校内の第5次調査では4棟、古墳時代中期末の住居址が確認されている。西北及び南西にあらわな県堀との関連を含め、概期の集落の中心は今回調査地よりは西の方にあるのではないだろうか。

平安時代前期9世紀になると、この辺りには集落が営まれるようになる。今回の調査では9世紀半ばから後半にかけての住居址が21棟発見されている。県ヶ丘高校内で行われた第4~5次調査においては、いずれも平安時代の住居

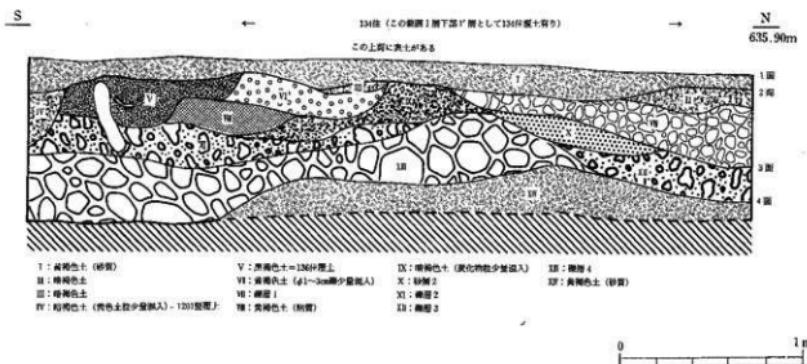
址が40棟と多く確認され、そのうち10棟は平安時代前期に属すると判断されている。また、調査は行われていないが、ブル、グランド拡張、家庭科教室棟などの建設の際に、土師器、須恵器、灰釉陶器の他綠釉陶器が出土していることが確認されている。つまり、この県ヶ丘高校の敷地内においては、一部薄川の大規模な流路跡となっている範囲以外においては、平安時代の集落が一面に広がっていたことが想像できる。また出土遺物として、綠彩文陶、綠釉三足盤、水晶鏡?帶、風字鏡といった特殊なものがみられるため、以前に多く出土した綠釉陶器などと合わせて、この地域での大規模な集落として存在していたことは間違いないであろう。

平安時代中期10世紀に属する遺構は今回の調査では確認できない。11世紀以降になると再び集落が営まれるわけだが、この絶続の理由はやはり薄川の氾濫ではないだろうか。今回調査区の北東部分は、恐らく9世紀の段階では一段低かったのではないかと思われる。そこが薄川の洪水の直撃を受けて埋没したのではないかと考えられ、それが1・2と3・4面の間に入る砂礫層であるとみられる。調査区の中心部分は、この洪水の直撃からは免れたのであろうが、一旦集落が途切れる原因であったとは考えられる。その後11~12世紀にこの地に再び集落が営まれるが、今回この範囲で確認した住居址は5棟と少ない。

北東部分の、洪水直撃部分に堆積した砂礫層の上に、土坑が作られるようにならったのは、渡来銭の存在から考えるに中世とみてよいであろう。その上に、中世にもう一度大規模な洪水が起り、調査区中心部分とのレベル差はなくなったものであると考えられる。しかし、中世はこうした洪水の常襲地帯であるため、集落の展開地としてはあまり頗みられない地になったと考えられている。遺構も、第4次調査で溝跡が確認されている程度であった。今回の調査では、そうした影響を受けながら、いくつかの遺構を検出し、遺物も得られている。確認された遺構は、中世以後の開発或いは県ヶ丘高校の造成などによって削られてしまったと思われ、残存状態が良好であるとはいえない。しかし、1225土からは北宋からの渡来銭の他、鉄釘が多く出土している。このことはこの辺りにそれらを用いた建物が存在していたことを示す資料となるものである。とすればほぼ等間隔で造られた溝跡は、それらを区画する溝であったと考えられるため、1226土でみられた鉢皿の存在する時期、15世紀後半には、この辺りになんらかの遺構が存在していたことは確かだといえよう。

以上、調査手順、時代別といった観点から本調査を眺めてきたが、まだ考察しなければならない点は多いように思う。それについては、一読後にご教示頂ければ幸甚に存する。この県町遺跡については、今までの調査地は11次調査を除いて、あがたの森公園、県ヶ丘高校の範囲内に限定されている。今回の調査地は遺跡範囲とすれば東端にあたる。また洪水層の下にも遺構の存在は確認されるため、今後行われるであろう調査によって、そうした点についても、明らかにできるのではないかと思われる。

最後になりましたが、今回の調査に際して多大なご協力をいただいた松本県ヶ丘高校職員をはじめとした関係者の皆様、風土研究会の皆様、そして冬の大雪にもかかわらず作業に従事していただいた皆様方に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。



第24図 基本土層（東トレンチ西面、136住周辺部分）

写真図版



調査区遠望
(東から)



調査区全景
(北が上)



45

緑彩文陶（内側） 104住



153

三足盤脚部 117住

図版1 調査区域航空写真、特殊遺物(1)



288

綠釉陶器（皿）グリッド



289

綠釉陶器（杯－内側）土坑1223



274

綠釉陶器（椀）134住



289

綠釉陶器（杯－底部）



288



328



118住



128

風字硯（内側）114住



129住



裏



128

風字硯（底部）



99住 遺物・礫出土状況（南から）



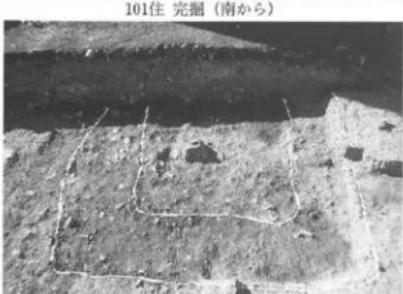
99住 完掘（南から）



101住 完掘（南から）



102住 遺物・礫出土状況（東から）



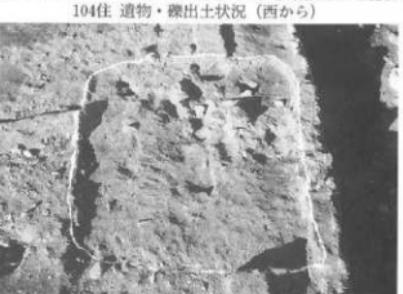
102住 完掘（東から）



104住 遺物・礫出土状況（西から）



104住 完掘（西から）



107住 完掘（南から）



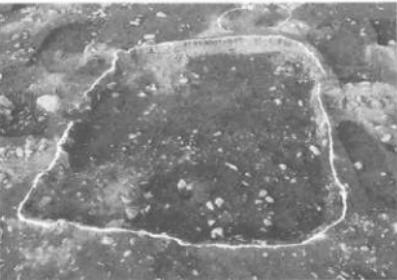
105住 完掘（東から）



105住 カマド（東から）



109住 遺物・礫出土状況（南から）



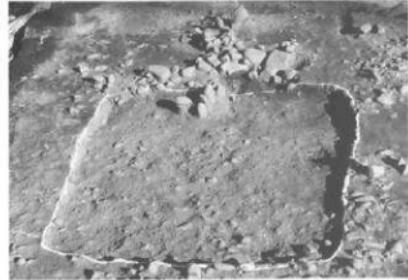
109住 完掘（南から）



109住 カマド（東南から）



110住 遺物・礫出土状況（西から）



110住 完掘（西から）



110住 カマド（西から）



111住 完掘（東から）



113住 遺物・出土状況（西から）



114住 遺物・出土状況（西から）



114住 完掘（西から）



114住 カマド（西から）



117住 遺物・出土状況（西から）



117住 完掘（西から）



117住 カマド（西から）



116住 遺物・露出土状況（東から）



118住 完掘（西から）



119住 完掘（東から）



120住 完掘（南から）



122住 完掘（西から）



122住 カマド（西から）



123住 完掘（東から）



123住 カマド（東から）



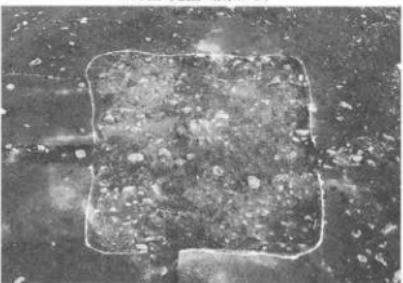
124・125住 完掘（南から）



126住 完掘（南から）



127住 完掘（西から）



128住 完掘（西から）



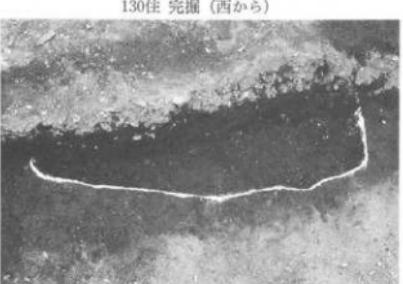
128・129住 完掘（西から）



130住 完掘（西から）



131住 完掘（西から）



132住 完掘（北から）

図版7 造構（住居址）



133住 遺物・礫出土状況（北から）



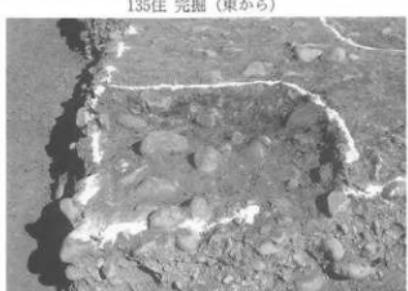
134住 完掘（西から）



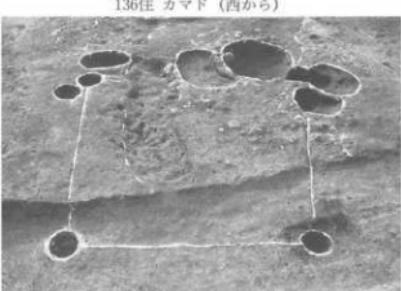
135住 完掘（東から）



136住 カマド（西から）



137住 遺物・礫出土状況（西から）



建物址3（東から）



綠彩文陶出土状況



授業風景

図版8 造構（住居址・建物址・綠彩花文出土状況）、行事記録



6



15



9



12



20



10



11



33



14

実測図未掲載

101住



13

6:99住 12、13:101住

9~11:100住 14~33:102住

图版9 99、100、101、102住出土土器



37



38



40



39



56



65



41



35



36

35~41:102住
56・65:105住

図版10 102、105住出土土器



87



96



89



100



90



101



73



92



86



116



97

73~97：107住

100、101：109住

116：110住

图版11 107、109、110住出土土器



117



119



124



126



129



118



140



139



123



144

117、118：110住 129、139：114住

119～124：111住 140：115住

126：113住

144：116住

図版12 110、111、113、114、115、116住出土土器



148



149



172



166



171



164



173



143



142



150



174

142~150 : 116住
164~174 : 117EE

図版13 116、117住出土土器



175



229



176



198



181



155



204



186



207



208



209



194



195

155～186：117住
194～198：118住
200：119住

204～208：121住

229：122住

図版14 117、118、119、121、122住出土土器



234



259



230



260



241



261



242



249



256



224



247



216

216~247:122住
249、256:123住
259:126住
260、261:127住



図版16 128、129、133住、土坑、グリッド出土土器



8



9



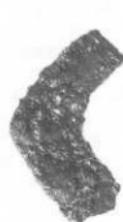
10



12

117住出土鉄器 8: 不明。9: 宇引貝か。10: 紡錘車

122住出土鉄劍



7



11



2



17



18



50



51



52

16

19

土坑出土鉄器

16: 1222土出土不明品

19: 1225土出土不明品



13



21



22



23



25



26



30



34



35



48

出土銭貨 13: 130住出土慶寧元寶。21: 1226土出土慶寧元寶。22: 1226土出土元符通寶。23: 1226土出土不明銭。25: 1234土出土慶寧元寶。26: 1242土出土明道元寶。30: グリッド出土太平通寶。34: グリッド出土聖宋元寶。35: グリッド出土慶寧元寶。48: グリッド出土聖宋元寶

県町遺跡緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	あがたまちいせき12きんきゅうはくつちょうさほうこくしょ							
書名	県町遺跡XII緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No165							
編著者名	澤柳秀利・内船団・太田圭都・清水完							
編集機関	松本市教育委員会（松本市立考古博物館）							
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号（〒390-0823 松本市大字中山3738番地1・Tel0263-86-4710）							
発行年月日	平成15年3月20日（平成14年度）							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
あがたまち 県町	長野県松本市 県2丁目1-1	20202	161	36度 14分 45秒	137度 59分 54秒	20011119～ 20020325	1,200	松本県ヶ丘高校体育馆 建替えによる
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
県町	集落跡	弥生 古墳 奈良 ～平安 中世	堅穴住居址 土坑 ピット 堅穴状遺構 溝址 流路址 集石	37軒 49基 69個 2基 5条 4条 3ヶ所	弥生土器 石器（磨製石鏡） 土師器 土器・陶磁器（土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・綠彩文陶・青磁・白磁・常滑焼・陶鏡） 金属製品（釘・刀子・紡錘車・苧引具・錢貨・不明品） 石製品（鉄帶・磨製石鏡）			薄川の氾濫の影響を強く受けながら存続した平安時代前期の集落址を確認した。綠彩文陶・綠釉三足盤・水晶製鏡等を出土する住居址もみられた。また、一部であるが弥生時代の遺物も出土している。

松本市文化財調査報告 No165

松本市県町遺跡 XII

—緊急発掘調査報告書—

発行日 平成15年3月20日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号

印 刷 アサカワ印刷株式会社

